

大原天子遺跡

川辺川農業水利事業「大原団地」造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.3

熊本県教育委員会

お はる てん し
大 原 天 子 遺 跡

川辺川農業水利事業「大原団地」造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1993.3

熊本県教育委員会



① 大原天子遺跡調査前



② 表土剥ぎ終了後



③ 調査終了後



④ 造成工事終了後

序 文

熊本県教育委員会では、九州農政局の委託を受け、川辺川農業水利事業の農地造成にともなう埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

これは前年度までの木上竜口・益手の両遺跡に続くものですが、近接するこの大原天子遺跡でも、同様に数多くの新しい歴史資料を得ることができました。

当遺跡は、現在よりおよそ2,400年ほど前の、縄文時代晚期の遺跡であり、多くの土器や石器などの貴重な資料が発見されたわけですが、特に顯著な遺物である打製の石斧は、この時代、工具としてよりも農具としての性格を有する道具であったと聞き及びます。今回大規模な農地造成が行われたこの地に、奇しくも有史以前の私達の先祖が、素朴な道具で農耕にいそしんでいた痕跡を見出したことは、実に感慨深いものがあります。

このたび、大原天子遺跡の発掘調査の報告書を刊行することになりましたが、本報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与するところがあれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった九州農政局ならびに地元の関係者の皆様、また御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げたいと思います。

平成5年3月1日

熊本県教育委員会

教育長 道 越 温

例　　言

1. 本書は、九州農政局川辺川農業水利事業の大原団地農地造成工事に先立ち、平成3年度に調査を実施した、球磨郡錦町大字木上字大原・天子所在の「大原天子遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は九州農政局川辺川農業水利事業所の委託を受けて、熊本県教育委員会が実施したものである。
3. 遺跡名は、その所在地の地名（字名）である「大原」「天子」の2カ所からとり、名付けている。
4. 現地での調査および遺物整理は、丸山伸治、濱田彰久がおこなった。なお整理は平畠信子、徳永みどりの協力を得て、平成4年度に熊本県文化財収蔵庫で実施した。
5. 本報告書中に使用した方位は、第1図「周辺遺跡分布図」の磁針が、真北を指すほかは、すべて磁北を指すものである。
6. 報告書中の遺物の実測図の縮尺は、一部の小型の石器等を除き原則として3分の1に統一し、補助的にスケールを付けている。
7. 整理後の遺物の保管は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市大江町渡鹿3丁目15-12）でおこなっている。
- 6、本書の執筆および編集は、島津義昭、丸山、濱田が熊本県文化財収蔵庫でおこなった。なお執筆は、出土土器の項を濱田、その他を丸山が行っている。

本文目次

写真図版（カラー）

序文

例言

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の経過（調査日誌抄録）	2
第2節 遺跡の位置と環境	4
1. 遺跡の位置	4
2. 遺跡の地理的環境	4
3. 調査区の地形	4
4. 遺跡の歴史的環境	5
第3節 発掘調査の概要	12
1. 調査方法および調査区の設定	12
2. 遺跡の基本層位	13
3. 出土状況	14
第Ⅱ章 遺構・遺物	16
第1節 繩文時代の遺構・遺物	16
1. 遺構	16
2. 遺物	23
(1)遺物の分布状況	23
(2)土器	32
(3)石器	44
第2節 その他の時代の遺物	62
第Ⅲ章 総括	63
(付論) 集石の使用実験	
写真図版（モノクロ）	69
報告書抄録	91

挿図目次

第1図 大原天子遺跡周辺遺跡分布図	8
第2図 遺跡周辺地形図	11
第3図 大原天子遺跡土層概念図	13
第4図 遺構配置図	15
第5図 大型土坑（住居跡状遺構）実測図	17
第6図 貯蔵穴状遺構実測図(1)	20
第7図 貯蔵穴状遺構実測図(2)	21
第8図 集石遺構実測図	22
第9図 土層断面図	23
第10図 繩文時代遺物分布図(1)	24
第11図 繩文時代遺物分布図(2)	25
第12図 繩文時代遺物分布図(3)	26
第13図 繩文時代遺物分布図(4)	27
第14図 繩文時代遺物分布図(5)	28
第15図 繩文時代遺物分布図(6)	29
第16図 繩文時代遺物分布図(7)	30
第17図 繩文時代遺物分布図(8)	31
第18図 繩文土器実測図(1)	34
第19図 繩文土器実測図(2)	35
第20図 繩文土器実測図(3)	36
第21図 繩文土器実測図(4)	37
第22図 繩文土器実測図(5)	38
第23図 繩文土器実測図(6)	39
第24図 繩文土器実測図(7)	40
第25図 繩文土器実測図(8)	41
第26図 出土石器実測図(1)	47
第27図 出土石器実測図(2)	48
第28図 出土石器実測図(3)	49
第29図 出土石器実測図(4)	50
第30図 出土石器実測図(5)	51
第31図 出土石器実測図(6)	52
第32図 出土石器実測図(7)	53

第33図 出土石器実測図(8)	54
第34図 出土石器実測図(9)	55
第35図 出土石器実測図(10)	56
第36図 出土石器実測図(11)	57
第37図 出土石器実測図(12)	58
第38図 球磨川流域の石器石材分布図	59
第39図 弥生土器・須恵器実測図	62

表 目 次

第1表 大原天子周辺遺跡一覧(1)	9
第2表 大原天子周辺遺跡一覧(2)	10
第3表 縄文土器観察表(1)	42
第4表 縄文土器観察表(2)	43
第5表 石器観察表(1)	60
第6表 石器観察表(2)	61

写真図版目次

図版1 大原天子遺跡（東より）、大原天子遺跡造成工事終了後（東より）	71
図版2 C-4区遺物出土状況（北東より）、（北西より）	72
図版3 1号大型土坑（東より）、2号大型土坑（北より）	73
図版4 1号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（北より）、完掘（北より）	74
図版5 2号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（南より）、完掘（南より）	75
図版6 3号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（南より）、完掘（南より）	76
図版7 4号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（東より）、完掘（南東より）	77
図版8 集石遺構、縄文土器（1～10）	78
図版9 縄文土器（11～20）、（21～30）	79
図版10 縄文土器（31～39）、（40、41、43、44）	80
図版11 縄文土器（42）、（45～50）、（51～55）、（56～60）	81
図版12 縄文土器（63）、（61、62、64～73）	82
図版13 縄文土器（74～76）、（77～84）	83
図版14 石器（85～92）、（93～100）	84
図版15 石器（101～107）、（108～112）	85
図版16 石器（113～124）、（125～133）	86
図版17 石器（134～141）、（142～149）	87
図版18 石器（150～155）、（156～161）	88
図版19 石器（162～167）、その他の時代の土器（168～174）	89

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

九州農政局では、建設省が建設を進めている「川辺川ダム」の工事にともなって、周辺の台地に大規模な農業団地の造成を計画している。九州農政局と熊本県文化課は埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ね、事前に造成予定地区内の埋蔵文化財についてはその情報を得るべく試掘調査をおこなってきた。平成2年度にはそのうち錦町木上の「大原団地」の造成について、工事予定地の埋蔵文化財の分布調査の依頼がなされた。

これにともない、文化課文化財保護主事坂田和弘が、当該地の試掘調査を行ったところ、27カ所の試掘坑のうち、半数を超える17カ所の試掘坑で遺物の存在を確認し、工事予定地に遺跡が存在することが確かめられた。

試掘で確認されたのは遺物としては、縄文時代晚期土器、弥生時代後期土器、平安時代初期の土師器・須恵器などである。またこのほか、近世期の集落やそれにともなう墓地も確認されるなど、幅広い時代の遺跡であることが確かめられた。

このため、破壊される遺跡について本調査をおこなうこととし、平成3年6月14日付けで、九州農政局長と熊本県知事の間で埋蔵文化財発掘調査負担契約を締結した。熊本県文化課では直ちに発掘調査に着手して、平成3年度7月から12月まで現地での発掘調査をおこなった。引き続き、翌平成4年度には報告書を刊行するため作業をすすめ、今回報告書の刊行に至ったものである。

2. 調査の組織

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	大塚正信 (文化課長) 隈 昭志 (教育審議員) 松崎厚生 (課長補佐)
調査総括	島津義昭 (文化財調査第一係長)
調査員	丸山伸治 (文化財保護主事) 濱田彰久 (文化財保護主事)
専門調査員	山崎純男 (福岡市教育委員会) 小池史哲 (福岡県教育委員会)
調査指導お よび協力者	宮田栄二 (鹿児島県埋蔵文化財センター) 田中聰一 (熊本大学大学院生)

調査事務 [九州農政局川辺川農業水利事業所]

大串修二	(工事課長)	(平成4年度)
平松清美	(工務監)	(平成4年度)
泉繁高	(工事課長)	(平成3年度)
西岡静夫	(工務監)	(平成3年度)

[熊本県教育庁文化課]

木下英治	(主幹・経理係長)	
高瀬保子	(参事)	(平成4年度)
相馬晴久	(参事)	(平成4年度)
川上勝美	(主任主事)	(平成3年度)
大広美枝子	(主任主事)	(平成3年度)

整理作業 平畠信子 徳永みどり 塩田喜美子 重永照代 江島園子 米倉五月
瀬上慶子

発掘調査 犬童英治 奥松五子 高橋ツタエ 高橋勝子 豊永文香 村山フミ子
森口陽子 柳瀬フミカ 山北房子 堀井三夫 坂田安信 中村きよ子
(付記) 発掘調査および整理に際しては、諸先生方より貴重な御指導御助言をいただいた。
また地元の皆様からも、多大の御協力を得た。ここに記して深く感謝申し上げたい。

3. 調査の経過 (調査日誌抄録)

- 7／2（火） 調査事務所用のプレハブを建設する。
- 7／3（水） 調査機材の搬入を行う。調査作業員初顔合わせ。
- 7／4（木） 隣接して建設される農免道（高原南部線）の平成3年度工事予定部分の踏査を行う。地形や周辺の遺跡の分布から後日試掘調査を行うことにする。
- 7／10（水） 本調査にあたって、調査区をさらに限定するため、再度試掘調査をおこなう。その結果、最終的に調査区を確定する。
- 7／12（金） 重機による表土剥ぎ取り作業を実施する。榎の切り株を避けて行うため、作業は難航し、18日まで断続的に実施する。
- 7／15（月） 手作業にて切り株を除去し、調査区の清掃（地面を削って平らにし、下の遺構を確認する作業）を行う。8／2（金）迄、断続的に清掃を行うが、大変な労力を伴う作業となる。
- 7／22（月） 測量の基準となるグリッドの杭打ち作業を実施する。
- 7／25（木） 調査区の地形測量を実施する。
- 7／29（月） 台風が通過し、大雨となる。

- 8／2（金） 土層観察用のトレンチを4カ所に設定する。
- 8／7（水） C－3区調査開始。包含層の掘り下げ、写真撮影、実測、遺物の取り上げを順次行う。
- 8／19（月） C－5区・C－6区調査開始。特にC－5区周辺は土器・石器の出土多し。土器は縄文晩期「山ノ寺式」、石器には「有肩打製石斧」が含まれることが判明する。
- 8／20（火） B－5区・B－6区調査開始。
- 8／22（木） 台風が接近し大雨となる。
- 8／26（月） B－4区調査開始。
- 9／3（火） C－5区の集石遺構調査開始。B－3区調査開始。
- 9／4（水） 近接するゴルフ場に落雷あり。遺跡周辺は雷の多発地帯とのこと。
- 9／5（木） C－1区・D－1区調査開始。
- 9／13（金） D－2区調査開始。
- 9／19（木） C－4区調査開始。
- 9／20（金） 1号大型土坑（住居跡状遺構）調査開始。
- 9／24（火） 2号大型土坑（住居跡状遺構）調査開始。
- 9／26（木） D－3区・D－4区調査開始。
- 9／27（金） 台風19号が接近し、風雨が激しくなる。文化課長の指示により事前に現場を退避し、ことなきを得る。
- 9／30（月） 台風は、九州地方に近来稀に見る被害をもたらし通過する。調査区内にも、椎の大木3本が倒れるなどの被害あり。この復旧に数日を要す。
- 10／4（金） C－3区調査開始。
- 10／9（水） C－2区調査開始。集石らしきものを3地点に確認する。人為的な集石かどうか判断に苦しむも、一応実測図を作成することとする。その後、結局自然の疊層の露頭らしいことが判明し、大きな時間的なロスとなる。
- 10／18（金） 隣接する農免道「高原南部線」の試掘の打ち合わせを行う。
- 10／19（土） D－5区・D－6区調査開始。
- 10／22（火） B－2区調査開始。
- 10／25（金） 集石の使用実験を行う。
- 11／7（木） この日より包含層下部の小土坑や、ピットの調査を行う。
- 11／19（火） 貯蔵穴状遺構の調査開始。
- 11／26（火） この日より3日間、農免道「高原南部線」の試掘を行う。遺跡は確認されず。
- 12／5（木） 現場撤収。調査終了。

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

所在地 熊本県球磨郡錦町 大字木上字大原・天子
工区 九州農政局川辺川農業水利事業「大原團地」

2. 遺跡の地理的環境

人吉盆地は、その中央部を西流する球磨川によって大きく二つに区切られている。盆地内の地形は、球磨川の両岸で大きな違いが見られ、南岸に広大な段丘が緩やかに広がっているのに対し、北岸は今からおよそ7～8万年前と言われる阿蘇山の火碎流に起因する熔結凝灰岩（灰石）の基盤を持つ、起伏した丘陵地がいくつも発達している。当遺跡の位置する高原台地は、こうした球磨川北岸の丘陵の中の一つである。

高原台地は、これら隆起した丘陵であるほか、古くは川辺川によって作られた扇状地の末端部であるという性格もあわせ持っている。「大原天子遺跡周辺遺跡分布図」（第1図）に使用した地図では、川辺川とその支流である銅山川とにはさまれた三角形が読み取れ、扇状地としての性格を明確に示している。遺跡の周辺では、場所により疊層の露頭を見ることができるが、これらはいずれも洪積世末期の川辺川の扇状地性の堆積物であると考えられる。

現在の人吉盆地周辺の年平均気温は約15℃程度であるが、夏期の最高気温は35℃、冬期の最低気温は約-9℃と寒暖の差が激しく、内陸性気候の特徴をよく示している。また気温差から、霧の発生する日が多いのもこの地域の特徴である。

3. 調査区の地形

遺跡周辺の地形は、「遺跡周辺地形図」（第2図）に示している。一見してわかるように周辺は起伏に富む地形で、およそ平坦な部分は認められない。おそらく激しい侵食が繰り返されたためであろう。例外的に調査区のやや南よりも、緩やかな傾斜面が見られるが、この周辺が最近まで集落として使用してきた場所で、試掘調査でも平安時代の集落の存在が指摘されたところである。

一方今回調査がおこなわれた地点は、起伏の激しい地形の中で、傾斜面に一部平坦面があらわれる部分である。喻えれば、ちょうど階段の中のステップのような箇所であり、通常の遺跡の立地のあり方からすれば、規模からしても、その存在が疑われるようなところといってよい。

さて調査区であるが、海拔約178mから175m程度の標高を持ち、北西から南東へと緩や

かな傾斜を見せている。また南西側は比較的なだらかな地形がのびるが、北東側は比高差約24m程度の深い谷が入り、急な傾斜面が続いている。この谷は現在水田として利用されているが、脇には小川や小規模の湧水も見られ、遺跡の立地の要件の一つを満たしている。なお、球磨川の現河道からの直線距離は約1,300mの位置にある。

4. 遺跡の歴史的環境

今回調査の行われた大原天子遺跡の一帯は、球磨盆地の中でも特に遺跡の集中する地点であり、各時代の人々の生活の痕跡を多くとどめている。周辺遺跡については、「大原天子遺跡周辺遺跡分布図」(第1図)および「大原天子遺跡周辺遺跡一覧」(第1表・第2表)に示しているが、ここでは遺跡分布の傾向と、時代毎の注目される遺跡について簡単にまとめてみたい。

はじめに、遺跡の大まかな立地についてであるが、遺跡の分布図からは次のような点を読みとることができる。①球磨川およびその支流域に多くの分布が見られること②球磨川の北岸と南岸では、南岸の方に多くの分布が認められること、などである。

河川の流域に集中的な遺跡分布が見られるのは当然のこととして、北岸と南岸との遺跡数の違いは地形の差に原因が求められる。すなわち、背後に山地を控え、狭い丘陵部しかない北岸に対して、南岸には平坦な段丘が緩やかにひろがり、稻作などに格好の生産の場を提供している。このことは同時に、時代毎の遺跡の分布にも影響を与え、縄文時代以前の遺跡が盆地縁辺の比較的高い標高の地点に位置するのに対し、弥生時代および古墳時代の大規模な遺跡は、南岸の平坦部にその多くを認めることができる。

さて当遺跡は、このような分布傾向の中で、縄文時代晩期の遺跡として球磨川北岸の丘陵上に位置するものであるが、周辺にはどのような遺跡が存在するのであろうか。時代を追って見ていくたい。

(1) 旧石器時代

球磨地方の歴史上の痕跡の最初である「旧石器時代」の遺跡であるが、最近では発見される遺跡数も徐々に増加の傾向をとどっており、次第にこの時代の石器文化の様相が明らかにされつつある。今から約2万2千年前の堆積と言われる始良Tn火山灰(AT層)を鍵層として、その下面に、人吉市血気ヶ峰遺跡からナイフ形石器文化が、またナイフ形石器、搔器、削器、彫器など多彩な石器群を持つ、狸谷I石器文化が山江村狸谷遺跡で確認されている。一方、AT層の上面では、人吉市の白鳥平遺跡、天道ヶ尾遺跡、鼓ヶ峰遺跡、山江村の大丸藤ノ迫遺跡、狸谷遺跡などで、石器文化の存在が確認されている。

(2) 縄文時代

縄文時代草創期の遺跡としては、狸谷遺跡、多良木町里城遺跡がある。いずれも隆起線

文土器が出土し、前者は細石器、後者は細石器と石鐵を伴っている。また白鳥平B遺跡では、爪型文土器と石鐵が伴っている。

早期になると、球磨地方の遺跡はかなり多くなる。大丸藤ノ迫遺跡からは塞ノ神式を中心とする多様な土器群、人吉市村山遺跡群からは押型文を中心とする土器群、天道ヶ尾遺跡からは手向山式土器などが出土している。また、これらの遺跡からは小穴を有する土坑・集石・炉穴などの遺構も検出されている。一方、石灰岩地帯の鍾乳洞にある球磨村大瀬洞穴遺跡、同村高沢洞穴遺跡では鹿などの獸骨の他、アサリ、ハマグリなどの貝殻が出土している。また、狸谷遺跡からは当時の竪穴式住居が検出され、当時の生活を知る有力な手がかりとなっている。

前期では、鼓ヶ峰遺跡で壺式土器と曾畠式土器が多く出土している。また、人吉市八峰遺跡から壺式土器に伴うと予想される玦状耳飾りが採集されている。

中期の遺跡では、人吉市射場ノ本遺跡から並木式土器、鼓ヶ峰遺跡から瀬戸内系の船元式土器や底部に鰐の脊椎骨の痕跡が残る土器などが出土しているものの、遺跡数が少なく、その様子ははっきりしない。

後期の遺跡としては、南福寺式土器や出水式土器が出土した鼓ヶ峰遺跡、西平式土器が出土した天道ヶ尾遺跡などがある。また、人吉市中堂遺跡は後期後半の辛川・三万田・天城式土器の時代の集落遺跡として著名である。

大原天子遺跡と同時期の晩期では、中堂遺跡で後期から引き続いて集落が形成され、古闇・黒川式土器の時期の住居跡が発見されている。主な石器や石製品では、十字型石器や円盤状石器など後期末から晩期にかけての特徴的な石器、長崎翡翠製の玉類や石錘、打製石斧などが出土している。また人吉市アンモン山遺跡は黒川式土器期の単純遺跡である。

(3) 弥生時代

球磨地方の弥生時代は、後期に特徴がみられ、独特な重弧文土器に代表される免田式土器が多く出土し、免田町本目遺跡、同町市房脛遺跡などが著名である。人吉市荒毛遺跡では多数の重弧文土器と共にV字溝が発掘されている。また、錦町夏女遺跡からは後期の花弁型住居跡や条溝が検出され、銅鏡、銅鏡などが発見されるなど重要な遺跡として注目されている。

(4) 古墳時代

古墳時代の球磨地方の中心は盆地中央部にあったと思われる。このことは錦町亀塚古墳群、同町四塚古墳群、免田町才園古墳群、同町鬼ノ釜古墳などの有力古墳がこの地域に集中していることからも窺われる。その周辺には小規模の古墳や、人吉市大村横穴群、錦町京ヶ峯横穴群のような横穴群が分布している。また、前期には南九州の独特な墓制である地下式板石積石室墓が作られ、荒毛遺跡や深田村新深田などで発見されている。

集落遺跡としては夏女遺跡で前期の竪穴式住居跡が検出されている。

(5) 歴史時代

古代における球磨地方の中心は、依然として盆地中央部にあったと考えられる。このことは須恵器や瓦の古窯跡（深田村高山古窯跡、錦町下り山古窯跡など）、古瓦出土遺跡（免田町久鹿寺田遺跡）など有力な遺跡のほとんどがこの地域に分布していることからもわかる。

一方で、人吉周辺も時代が下るに従って中心的な地域の一つとなってきたことが、『和名抄』における「人吉郷」の存在などからわかる。さらに中世に入るとその位置は逆転し、人吉周辺の優位を示す史料が急増してくる。

しかし、いずれにしても、一般の生活状態を示す遺跡の資料は少なく、この種の資料の発見が期待されている。



第1図 大原天子遺跡周辺道路分布図

第1表 大原天子周辺遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	時代	備考
1	大原天子遺跡	縄後・晩 弥奈平	縄文晚期土器 有肩打製石斧
2	平川遺跡	縄早	縄文後・晩期土器
3	木上益手遺跡	弥古	縄文早期土器 平成2年度県調査
4	天子山遺跡		弥生後期土器 石包丁
5	夏女遺跡		弥生後期から古墳前期集落跡
6	新深田地下式板石積墓	古	平成元～2年度県文化課調査
7	晴山遺跡	縄	7基 鉄劍 鉄鏃 土師器
8	平野遺跡	縄早	
9	湯取野遺跡	縄	
10	川辺城跡	縄中	
11	川辺遺跡		磨製石斧數個出土
12	南宮遺跡	弥後	弥生後期土器
13	湯原古墳群	古	10数基の古墳群
14	湯免古墳群(竹の追古墳群)	古	円墳數基あり
15	湯免遺跡	縄早	条痕文土器
16	保石遺跡	旧縄	
17	新造遺跡	縄	
18	石板舗野古墳群	古	20数基の小円墳散在
19	深水小園遺跡	古中	集落跡 昭和62年度県文化課調査
20	深水谷川遺跡	縄晩 平	土器窯址場 挖立柱建物 昭和63年度県文化課調査
21	別府遺跡	縄	
22	鳥越遺跡	縄後・晩	御領式 夜臼式土器出土
23	人吉良芸院地下式 板石積石室	古	
24	高原遺跡	弥古	
25	吉野尾古墳	古	散布地
26	瀬戸山古墳群	古	数10基の小円墳 消滅
27	三石遺跡	縄早 弥	押型文土器 打製石斧 重弧文土器
28	三石横穴群	縄古	横穴
29	十日市横穴群	古	
30	柳瀬の城ヶ峰	古中	城跡
31	城ヶ峰横穴群	古中	横穴
32	小原横穴	古中	(装饰)
33	井沢埋蔵銭銭発見地	古中	唐、宋貨錢982枚と土師器碗多数
34	井沢遺跡	古中	
35	井沢権現社遺跡	古中	剣片尖頭器
36	覚井古墳	古中	封土を破失 横穴式石室
37	陳の内横穴群	古中	十島、柳瀬間の道路両側に開口
38	鹿城跡(柳瀬城跡)	古中	城跡
39	一丸遺跡		磨製石器
40	京ヶ峰遺跡	古後	
41	京ヶ峰横穴群	古後	横穴(装饰) 県指定史跡
42	集五地城	近中	
43	尼ヶ土手中世屋敷跡	中中	
44	尼ヶ土手の古塔	中中	屋敷跡
45	大王原遺跡	縄早・中	
46	井手口遺跡		
47	今山船尾祭祀遺跡		
48	休園坊跡		
49	山神社跡		
50	七中口窯跡		須恵器窯跡
51	上大鶴薬師堂跡		
52	上大鶴觀音堂跡		
53	丸目森人墓	近	近世初頭の剣客の墓
54	下り山窯跡群		須恵器窯跡9基
55	火口出遺跡	近	
56	桑原家住宅		国指定重要文化財
57	下原遺跡		
58	龜塚古墳群	古中～後	前方後円墳3基 1号墳は県指定史跡
59	兔塚遺跡	弥後	弥生後期土器
60	福堂遺跡	縄 弥	縄文土器 石器 弥生土器
61	忠ヶ原遺跡		
62	一の宮跡		
63	東方遺跡		
64	一武城跡		
65	一乗寺跡	中	城跡 寺院跡
66	覚井遺跡		
67	坊主屋敷遺跡		
68	内村遺跡	縄早	土師器

第2表 大原天子周辺遺跡一覧(2)

番号	遺跡名	時代	備考
69	松尾遺跡	弥	
70	土木園遺跡		
71	原村遺跡	弥	
72	松木園遺跡	弥	
73	木目遺跡	弥	
74	竹の内遺跡	繩後・晚	
75	四塚古墳群	古	
76	四坂遺跡	弥	
77	寺村遺跡		
78	内坂庵跡		
79	魚地遺跡	繩	
80	戸平山祭祀遺跡	弥	
81	丸塚遺跡	繩	
82	下原遺跡	弥	
83	樺田遺跡	繩	
84	油田遺跡	繩	
85	尾畠遺跡	繩	
86	日の出遺跡	弥	
87	日の出祭祀遺跡	弥	
88	寺道原遺跡	古	
89	大木川堀遺跡	弥	
90	桜木遺跡	弥	
91	古永里遺跡	繩	
92	塙脇遺跡	弥	
93	清水遺跡	繩	
94	西別府遺跡	弥	
95	免田の茶屋跡	近	
96	久保遺跡	弥	
97	五木松遺跡	弥	
98	永池城跡	繩早	
99	才國遺跡	中	
100	才國古墳群	弥	
101	黒田遺跡	繩早・前	
102	黒田墓誌銅板出土土地		
103	二子遺跡	古	
104	宝塚古墳	弥	
105	球磨農業高校校庭遺跡	弥	
106	大正町遺跡	弥	
107	八幡町遺跡	弥	
108	焼野遺跡	弥	
109	前田遺跡	近	
110	上久鹿遺跡	古	
111	庄屋の庚申塔	近	
112	水跡遺跡	古後	
113	水跡横穴群	古後	
114	深田加茂遺跡	古後	
115	別府遺跡	旧	
116	沖松遺跡	繩	
117	荒茂勝福寺遺跡	弥	
118	荒茂横穴群	古後	
119	上阿蘇洞窟遺跡	古後	
120	上阿蘇遺跡	古後	
121	前平遺跡	中	
122	高山西城跡	中	
123	赤坂須恵器窯跡	中	
124	オンバガサコ遺跡	中	
125	深田村運動公園遺跡	中	
126	下里遺跡	中	
127	下里横穴群	中	
128	深田小学校遺跡	中	
129	深田城	中	
130	辰口古塔群	古	
131	辰口横穴群	古	
132	荒田横穴群	古	
133	荒田积迦堂	古	
134	岩城遺跡	中	
135	岩城	中	
136	岩城横穴群	古	
137	瀧城跡	中	
138	迫の庚申塔	近	
139	高ん原入口遺跡	弥	
140	立野遺跡	弥	



第2図 遺跡周辺地形図

第3節 発掘調査の概要

1. 調査方法および調査区の設定

調査区の設定

本調査に先立つ平成2年度に、工事予定地内に合計27本のトレンチ（試掘坑）を設定して行った分布調査では、半数以上の17本から縄文時代晚期の遺物、および奈良時代～平安時代の遺物を確認した。この結果今回の調査区を中心とした一角に縄文時代晚期の包含層、さらに西側の緩やかな斜面に平安時代の集落の存在することが明らかになった。

本調査では、この分布調査に加え、ふたたび工事該当区域内に間隔を詰めた小規模の試掘坑を設定し、遺物包含層の存在の有無を判断し、実際の調査区を決定した。これは、試掘段階での工事計画が施工時には大幅に変更になっていたこと、および周辺の地形の起伏が激しく、遺跡が面的な広がりとして把握できなかったことによるものである。

こうして、決定した調査範囲は、I区約1,300m²、II区約1,200m²であり、その範囲に限定して重機による表土剥ぎ取りを実施した。なお表土剥ぎの結果、II区は、表土の直下に疊層があり、すでに遺物包含層が削平されているものと判断できたので、地形測量のみを行い、実際の調査は、I区に限定して行うこととなった。

なお調査区には、測量の基準とするため、調査用グリッド（区画）を10mの間隔で設定した。グリッドの設定方向は、工事用のメッシュの方向に沿ったもので、南東から北西に向かって1 2 3 …とアラビア数字で、また直交する側を北東から南西へA B C …とアルファベットで表している。（第4図「遺構配置図」）

調査の方法

調査方法は、グリッド法を採用し、土層観察用の畦（セクション）を適宜確保しながら、一区画毎に掘り下げて行く方法をとった。具体的には、縄文時代の遺物包含層である基本土層（第3図「大原天子遺跡土層概念図」）の第Ⅱ層および第Ⅲ層までが掘り下げの対象となった。こうして掘り出した遺物は出土状態を写真と実測図とに記録した上で取り上げを行っている。遺物の出土量が多い区画では、同一の作業を繰り返し行う手順となる。なお、セクションは遺物取り上げ終了後、取り外した。

これらの遺物の取り上げ作業が終了した時点で、区画毎に清掃を行い、第IV層の上部面で下部の遺構の有無を確認した。存在が確認された遺構については、引き続き調査を行った。

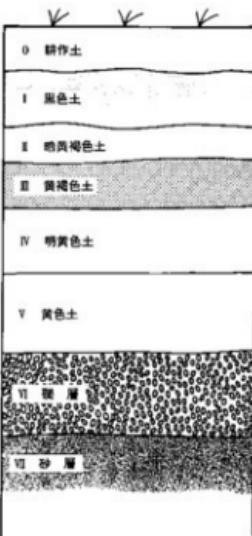
また、土層の観察と縄文晚期以前の文化層の有無を確認するため、4カ所で深掘りのトレンチを設定した。第VI層疊層・第VII層砂層まで掘り下げたが、遺構・遺物は確認できなかった。

2. 遺跡の基本層位

球磨地方、とりわけ今回調査の行われた高原台地の周辺は、一般に複雑な地形を呈しており、一見なだらかそうな地形でも、実は狭い間隔で激しい褶曲を繰り返している。遺跡周辺の切り通しの崖などでも、表面の火山灰層の直下にすぐに疊層の露頭が現れる箇所なども数多く見ることができる。

当遺跡でも、土層の観察のため、合計4ヶ所で深掘りのトレンチを設定したが、いずれも層位、および各層毎の厚みが極端に異なり、遺跡の典型的な層位を示すものとはなり得なかった。このため、ここでは、それらのトレンチ

の観察結果などから、当遺跡の土層の



第3図 大原天子遺跡土層概念図

概念図を「大原天子遺跡土層概念図」(第3図)として、示すことにした。また褶曲の激しい、この周辺の地層の一例として、土器が集中的に見られたC-4区の「土層断面図」(第9図)を、掲げることとした。

先ず、30cm程度のⅠ層の表土を取り除くと、第Ⅱ層の黒色の層が存在する。高原台地全体の表層を覆っているカカフカした土壤で、俗に「黒ボク土」といわれる火山灰層である。厚みはおよそ20cmから40cm程度で、当遺跡の縄文時代晚期の遺物のほとんどを包含する土層である。

次の第Ⅲ層はⅠ層とⅢ層の漸移層であり、縄文晚期の遺物は一部この層の上層には包含されることがある。厚みはおよそ10cm内外である。

第Ⅲ層は、色調から、「赤ホヤ」層と考えられる層である。高原台地には赤ホヤ層は薄い層として認識されることが多いが、当遺跡でもおよそ15cm程度が確認される。なお、遺構の確認は、遺構の埋土と明確な色調の差を示すⅣ層ないしこのⅢ層で行っている。

第Ⅳ層は、明黄色の粘質土で、次の第Ⅴ層とは、大差のないものであるが、Ⅴ層中には風化した凝灰岩の二次堆積と見られる直径4~5mmの小粒を含んでいる。この両層は厚みは場所により大きく異なっており、1mから5m程度と大きく差が見られる。

第Ⅵ層は、疊層であり、直径5~6cmのやや角ばった疊を多量に含んでいる。第Ⅶ層の砂層とともに、洪積世末期と言われる川辺川の扇状地性の堆積物とみなしてよいであろう。

なお、このVI層の疊層は、褶曲のため調査区の各所に現れているが、疊の形状や熱を受けて赤変しているかのような色調を呈するため、いわゆる「集石遺構」とまぎらわしい点があり、注意を要するものである。なお、この疊層と砂層は幾層かの堆積を繰り返し、やがて基盤の凝灰岩へと到達するものと思われる。

3. 出土状況

大原天子遺跡で出土した、時代毎の主要な遺構・遺物及び、それぞれの出土地点は、およよその通りである。出土地点については、「遺構配置図」(第4図)に示している。

まず「縄文時代晚期」の遺構としては、調査区の北側に位置する2基の大型土坑がある。柱穴や炉穴、硬化面などの付帯設備はなく、住居跡としての要件を満たしてはいないが、形態などから小型の住居跡と推定されるものである。

また、これと同時期と推定される遺構として、C-5区に集石遺構がある。直径1m程度の円形の掘込みと、内部に赤変した小型の疊を多量に含むものである。なお周囲には破碎疊の分布が見られる。

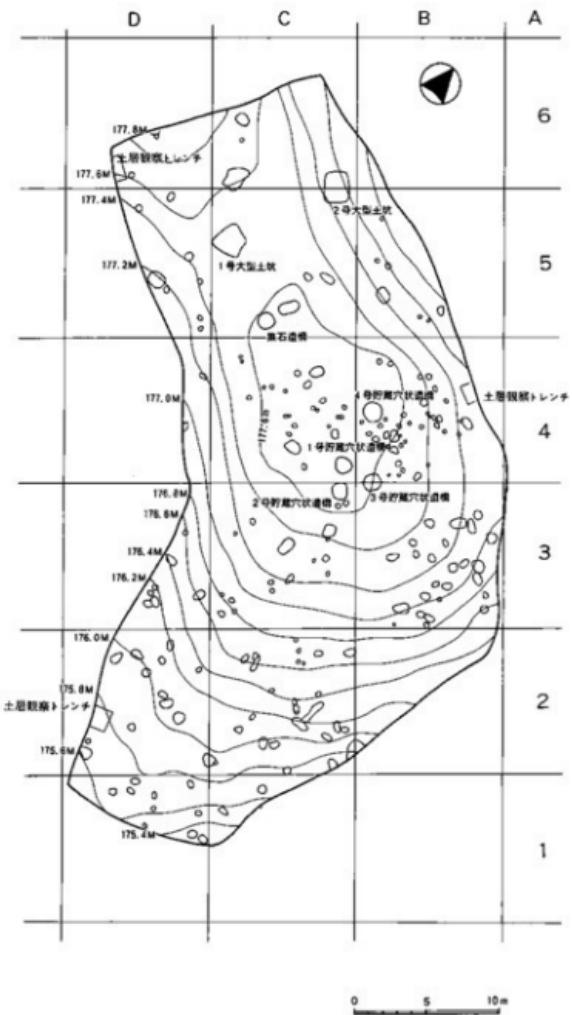
次に同じく晩期の遺構として、4基の貯蔵穴状の遺構がある。調査区のほぼ中央部に集中的に分布するもので、内部が袋状にえぐれるという形態から貯蔵穴としての性格を持つものと考えられる。4基はいずれも並列して分布することから、ほぼ同時期に作られたものと考えられる。

なお、この時代の遺物としては、C-4区を中心とした一角から、集中して「山ノ寺式」相当の、浅鉢・深鉢などが出土している。土器は粗製土器、および黒色磨研系の2種が認められる、出土総数は831点である。

また、ほぼ同様の分布で、石器が出土している。打製石斧が、15点、くさび型石器2点、黒曜石剝片62点、また注目される石器では「有肩打製石斧」が9点出土したほか、それら石器の素材としての剝片が41点と多数出土している。

これらの少ない遺構と、遺物の出土のあり様は、当遺跡の性格を考える上で重要である。当遺跡は、以上の遺構遺物が主なものであり、ほぼ縄文時代晩期の単純遺跡とみなしてよいものであるが、例外的に10点の異なる時代の遺物が混入している。

まず、弥生時代中期の土器片が7点出土している。試掘調査では、西側の一帯で弥生時代の土器が採集されていることから、そこよりもたらされた可能性が高い。また、須恵器の破片が3点だけ見つかっている。細片のため、全体は不明だが、同じく周辺に異なる時代の遺構の存在することの証明となろう。しかし、いずれも出土点数が圧倒的に少ないとから、本来的な出土とは考えられない。当遺跡の縄文晩期の単純遺跡であるという性格には変わりはない。出土にも一定の分布傾向は見られなかった。



第4図 造構配置図

第Ⅱ章 遺構・遺物

第1節 繩文時代の遺構・遺物

1. 遺構

(1) 大型土坑（住居跡状遺構）（第5図）

調査区の北側のC-5区・C-6区にかけて、ほぼ南北に並ぶような形で検出された土坑である。立地としては、上段からの傾斜が止まり、テラス状の平坦な地形に続く部分の端にあたり、広場を見渡すような位置にある。遺構は上部を削られているため、現存の深度は浅く、残存状態もあまりよくない。通常の竪穴住居に見られる硬化面や、柱穴、炉跡などは伴っていない。

しかしながら、ほかに検出した土坑と比較して、両者だけが極端に大型であること、また両遺構がほぼ南北に並ぶように検出されていることから、あまり変わらない時期に、しかも一時的に営まれた住居跡の可能性が高いと思われる。

1号大型土坑

C-5区で、検出された大型の土坑である。この土坑は、主軸方位をN-86°10' - Eに取り、長辺1.82m、短辺1.78mを測る。ややいびつながらも、ほぼ方形のプランを呈するものである。深さは約15cmと浅いことから、上部はかなり削平されているものと考えられる。

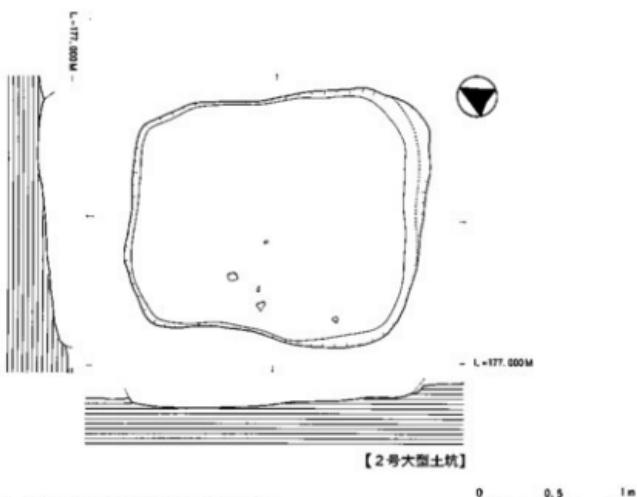
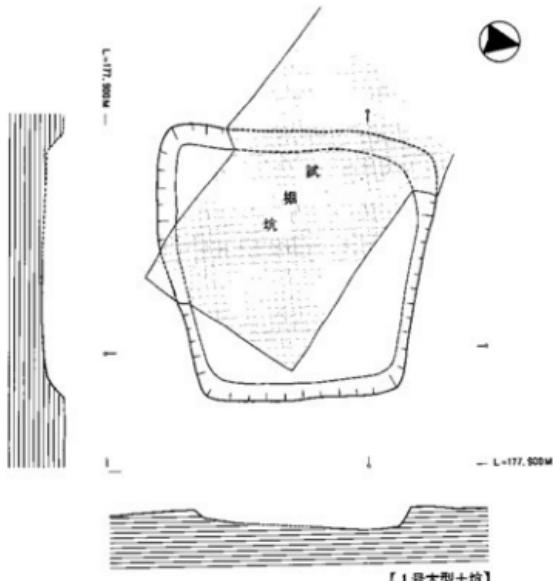
遺構内部の埋土は、上層がややカクカした黒色土で、縄文時代晩期の包含層と同じ土が、また下層はややしまった黄色のロームが入っている。

出土遺物は少なく、縄文晩期相当の土器細片が2点のみ出土している。

2号大型土坑

C-5区とC-6区とにかけて検出した大型土坑である。この土坑の主軸方位はN-34° - Eに取り、長辺1.92m、短辺1.62mを測る。1号土坑に比べれば、やや細長い平面形を呈している。残存深度は、およそ12cmと、これも上部はかなり削平を受けているものと思われる。

埋土は黒色土と黄色土が混じりあったもので、直径5cmほどの礫もかなり混入している。出土遺物は1号と同様に少なく、縄文晩期の土器細片5点を出土したのみである。



第5図 大型土坑（住居跡状造模）実測図

(2) 貯蔵穴状遺構（第6図・第7図）

C-3・4区、B-3・4区に並列するように検出された4基の土坑群である。1号～3号までは近接し、4号のみはやや離れているが、同様の土坑は他に検出されていないことから、ほぼ同時期に同じ意図を持って掘り込まれたものであると見なしてよい。

いずれも直徑90～130cm程度の円形の平面形で、内部は袋状にふくらむような傾向が見られるなど、形状は貯蔵穴としての要件を満たしている。ドングリなど植物性の遺物の出土はないが、出土した土器などから縄文時代晩期の貯蔵穴と判断している。

なお、土坑の上面が不整形になるのは、壁の崩落と掘り過ぎのためである。

1号貯蔵穴状遺構

C-4区で検出された土坑である。直徑97～103cm程度のほぼ円形の平面形を持ち、断面はU字形で深さは55cmを測る。

内部の埋土は、およそ3層に分層が可能で、上層よりやや粘質の褐色土、中層に小量の炭化物を含むザラザラした黄褐色土、そして下層には炭化物を多量に含む黄色土が堆積している。

出土遺物は、縄文土器片5点と、チャートの剝片を1点確認している。

2号貯蔵穴状遺構

C-3区で検出した土坑である。直徑105～113cm程度のほぼ円形の平面形を呈する。断面はU字形で、現存深度は59cmを測る。

埋土は4層に分けられ、上層から暗褐色土、多量の炭化物を含む黄褐色土、暗黄褐色土、そして底面に黄褐色土が堆積している。

出土遺物の総数は88点と多く、内訳は土器片84点、磨石1点、黒曜石剝片が3点となっている。

3号貯蔵穴状遺構

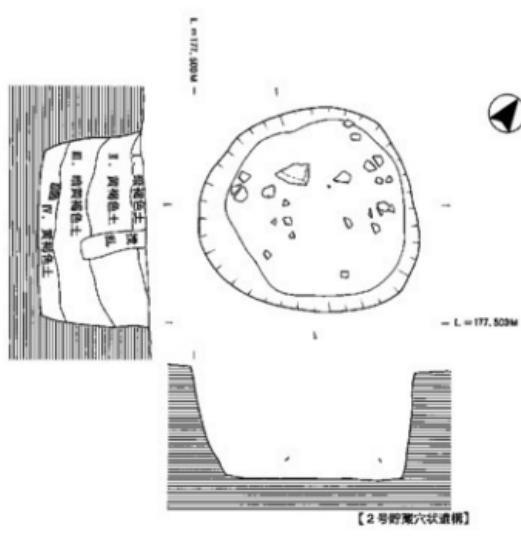
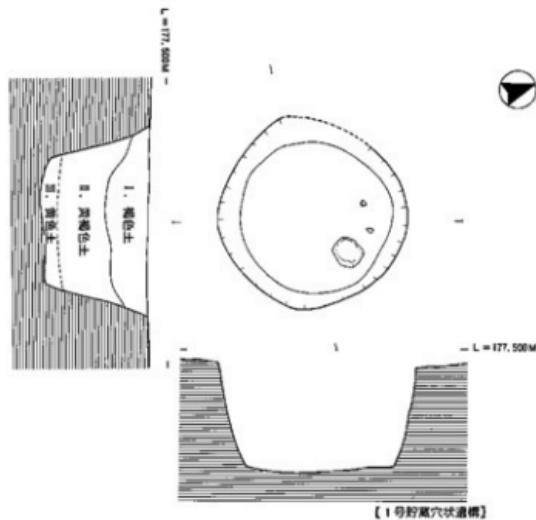
B-3区とB-4区にまたがる形で検出した土坑である。平面形は、直徑103cm前後のやいやいびつな円形である。断面はU字形であるが、壁面には上部よりふくらみ袋状になる部分がある。

埋土は、2号とほぼ同様で、最下層に砂層が堆積する点だけが、他と異なっている。出土遺物の総数は131点と、2号同様に多く、その内訳は、土器121点、たたき石1点、黒曜石剝片2点、その他の石材の剝片が7点となっている。出土遺物の中でも、底面近くで出土した土器（第21図41）は、波状口縁の特徴的なもので、この土坑の営まれた時期の決め手となる。

4号貯蔵穴状遺構

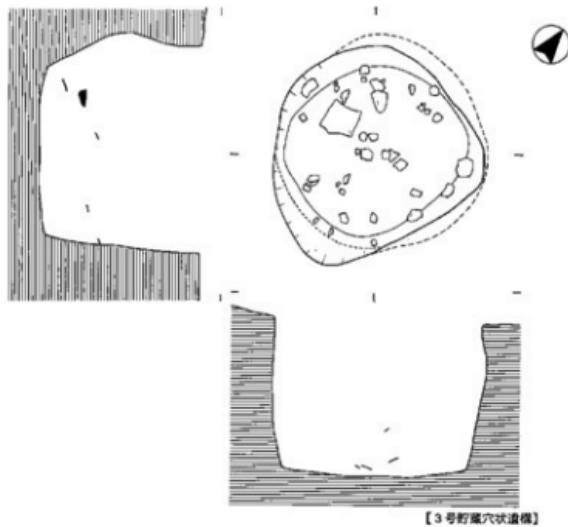
B-4区で検出したもので、他の3基とやや離れて位置していた土坑である。平面形は、直径125cm前後のほぼ円形、現存する深さは約80cm程度で、他の土坑と大差はない。断面形はU字形であるが、3号と同じく壁の中ほどがえぐれて、袋状になるのが特徴である。

埋土は3層に分層でき、上層から暗黄褐色土、暗褐色土、灰褐色土と堆積し、いずれも少量の炭化物を含んでいる。出土遺物は、約80点の土器片のほか、数点の石器剝片を含む。

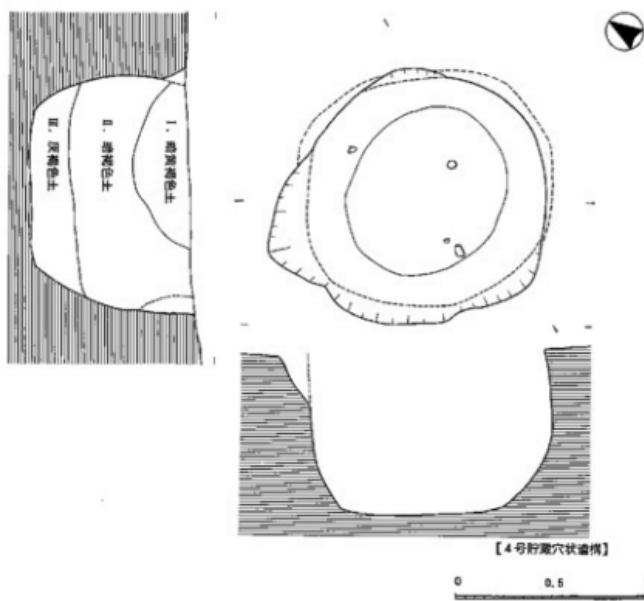


0 0.5 1 m

第6図 贯藏穴状遗構 実测図(1)



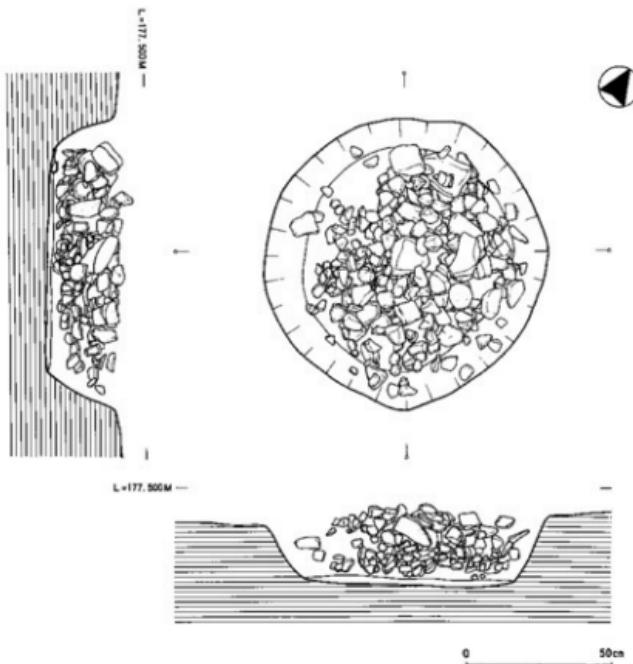
【3号贮藏穴状遗構】



【4号贮藏穴状遗構】

0 0.5 1 m

第7図 貯蔵穴状遺構 実測図(2)



第8図 集石遺構実測図

(3) 集石遺構（第8図）

C-5区の南東側に検出された縄文時代晩期のものと思われる遺構である。平面形は、直径93~98cm程度のほぼ均整のとれた円形を呈する。掘り込みの現存深度は約28cm内外で、内部は約3cmから18cm程度の大小の礫がほぼびっしりと詰まっている。礫の主体は5cm程度であるが、上部に大型、下部に小型の礫が入るのが一つの特徴である。また、礫のうちおよそ1/3ほどは熱を受けて赤変しており、炉として使用されたらしいことが理解できる。

内部の埋土は、およそ2層に分層でき、上層が褐色土、そして底の5cm程度はザラザラした感じの縮まった黒色土が堆積し、この中には小量の炭化物が含まれていた。遺物は、底に近い面で縄文土器の細片が1点が出土したのみである。

調査区内では、数カ所に自然の礫層の露頭があり、人為的な集石遺構とまぎらわしいものが見られたが、自然の礫層は礫の大きさが均質であるなどの相違点があった。

なお、これが「炉」としての使用が可能であるかどうか、同様の構造のものを作成し、使用実験を行っている。（第Ⅲ章 総括 付論「集石の使用実験」）

2. 遺物

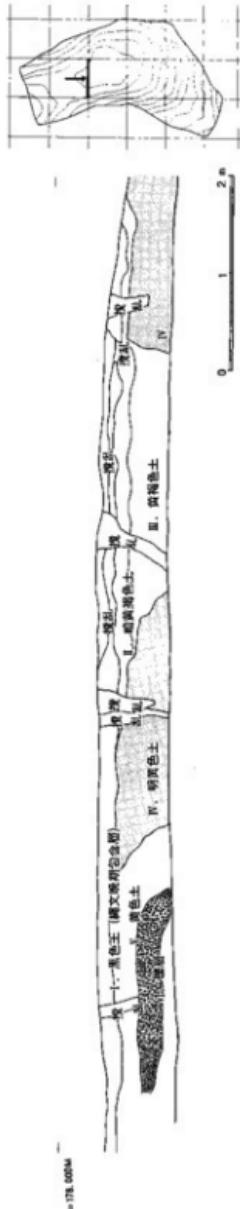
(1) 遺物の分布状況

当遺跡の遺物分布は「縄文時代遺物分布図(1)～(8)」(第10図～第17図)にグリッドごとの平面と断面をドットで示し、実測図(第18図～第37図)に載せた遺物で特徴のあるものは特にその出土地点を図中に示している。

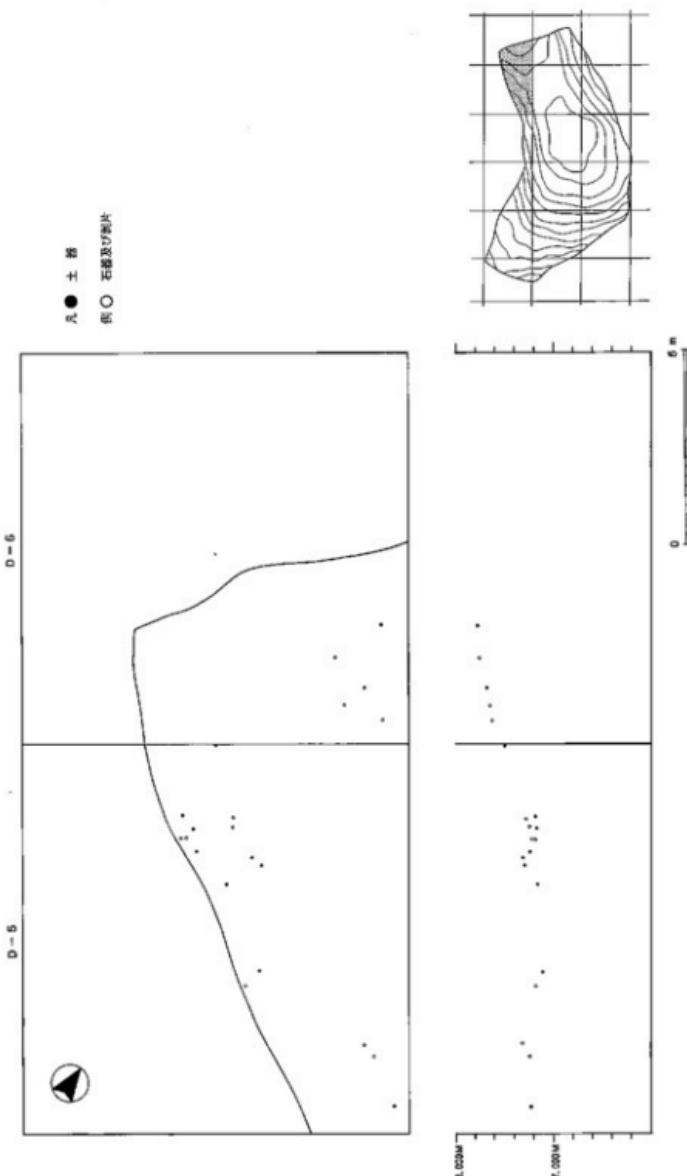
「土層断面図」(第9図)に示したとおり、木根などによる搅乱がかなりあるものの、遺物のほとんどが第Ⅰ層の黒色土の中からの出土であり、第Ⅱ層以下からの遺物の出土はない。このことから、Ⅰ層の分布範囲が、遺物の存在する範囲ということになる。時期もほとんどが晚期のものであるので、この層は縄文晩期の包含層と考えられる。

包含層から出土した遺物は総数1,225点で、うち土器が831点である。遺物はC-4区、C-5区およびB-4区の南西部に最も濃密な分布を示し、周辺にいくに従って、次第に少なくなる。この部分は遺跡が立地しているステップ状地形の中で最も高く平坦な部分で、貯蔵穴状遺構、集石遺構などの遺構も多くがこの部分にあり、この遺跡の中心と見て良い。

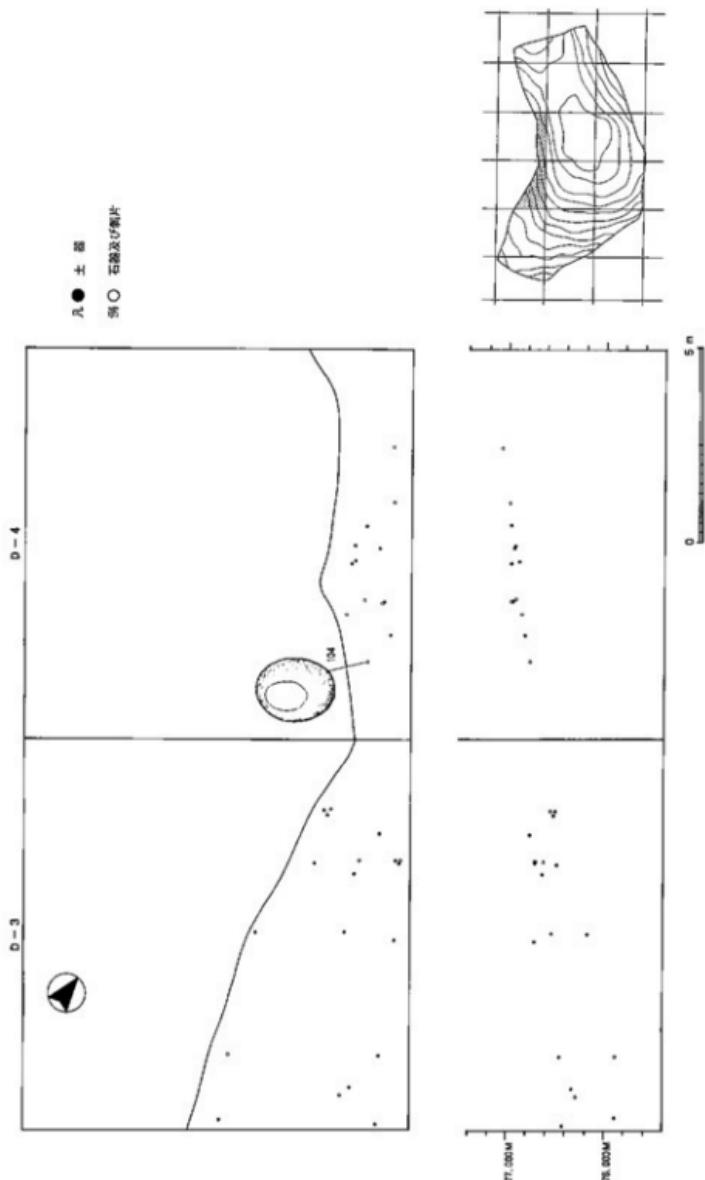
また、遺物以外にも砂岩、粘板岩などの破碎礫が多数出土したが、その分布状況も遺物とほぼ同じである。



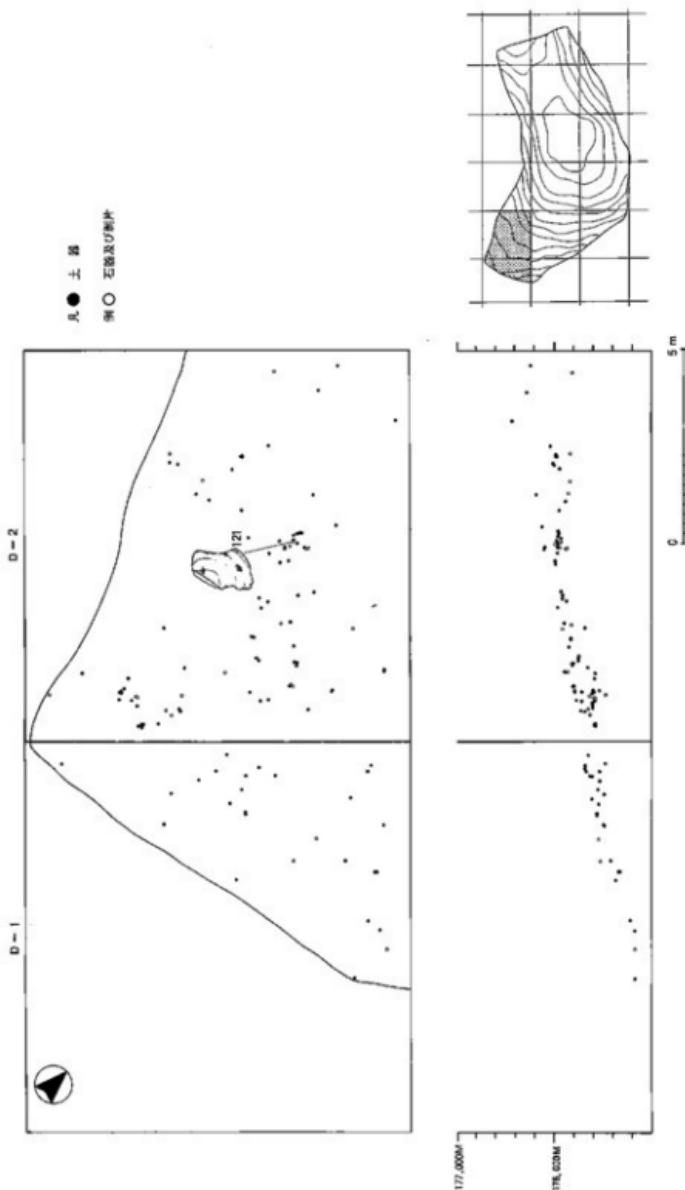
第9図 土層断面図



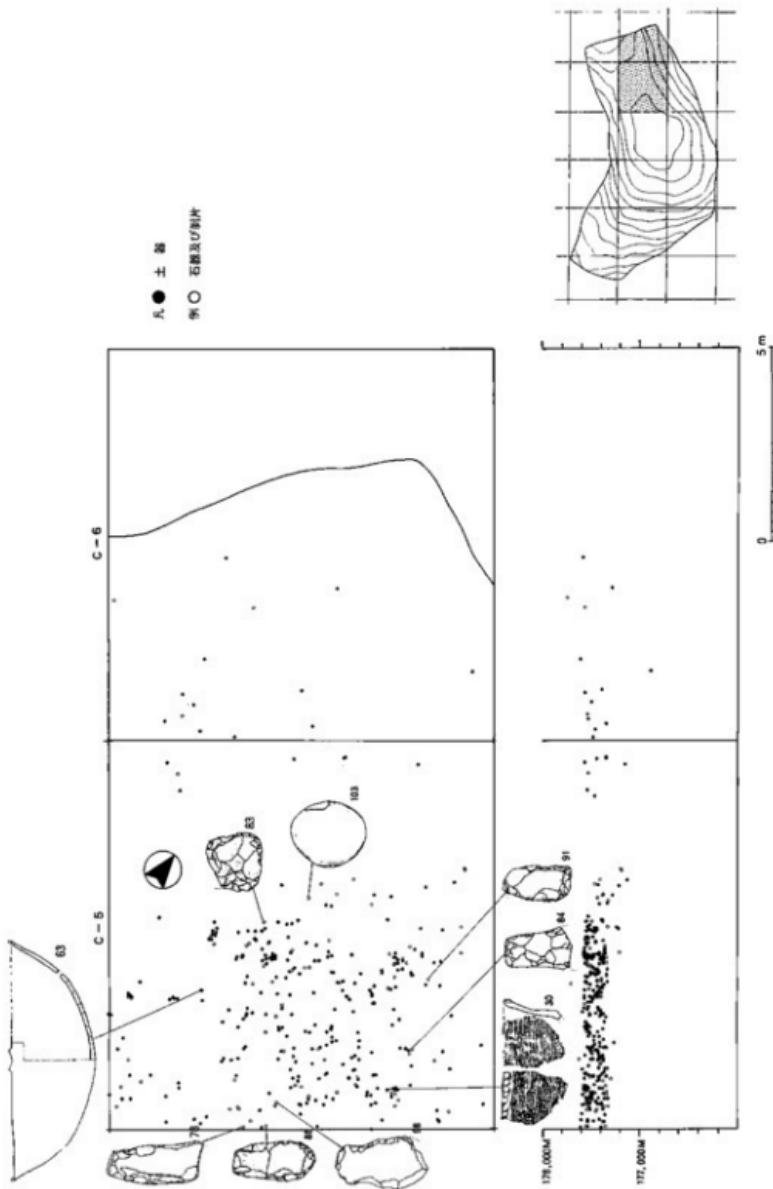
第10図 縄文時代遺物分布図 (I)



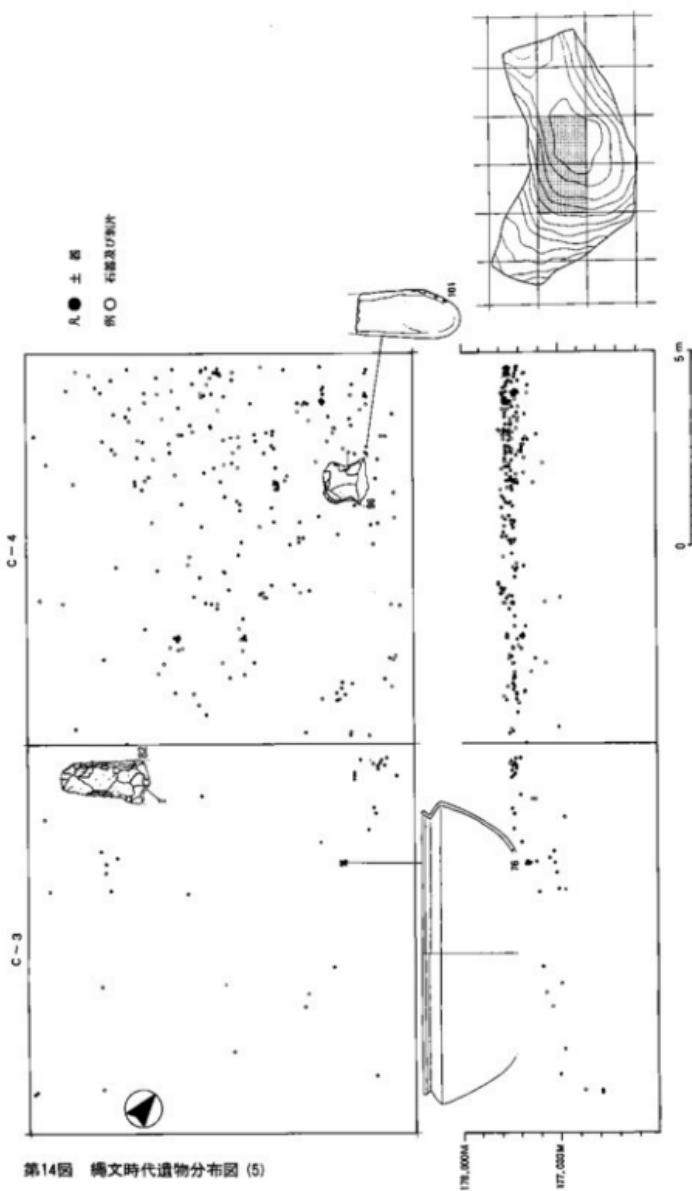
第11図 縄文時代遺物分布図(2)



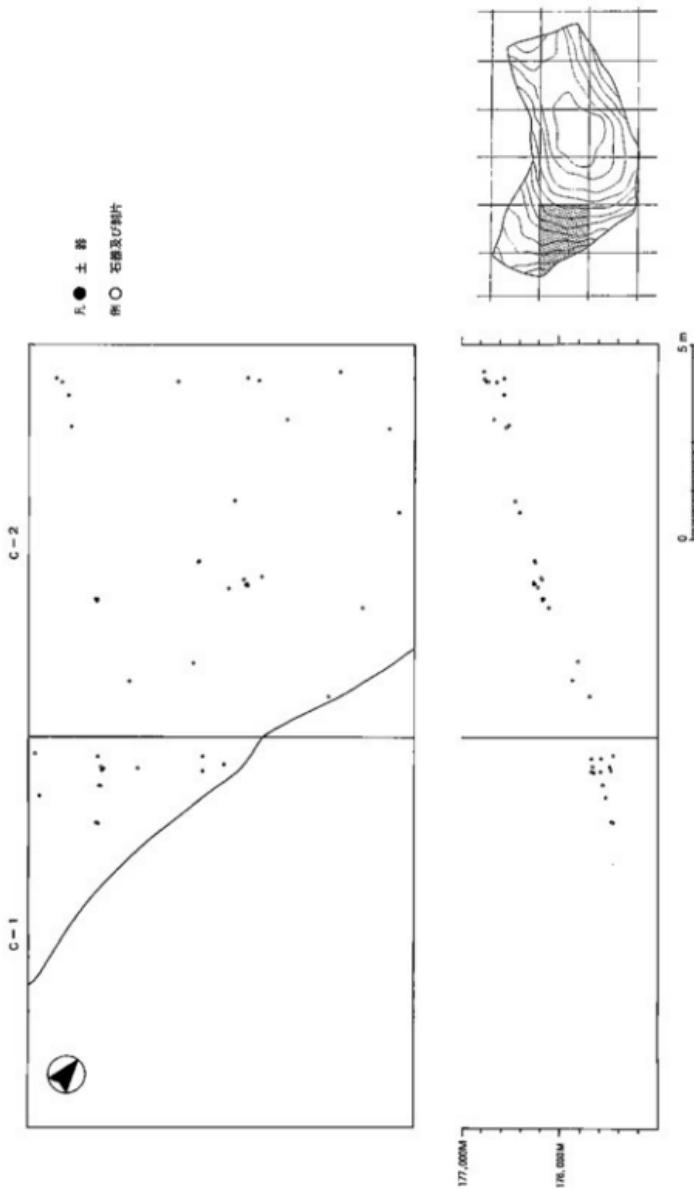
第12図 縄文時代遺物分布図(3)



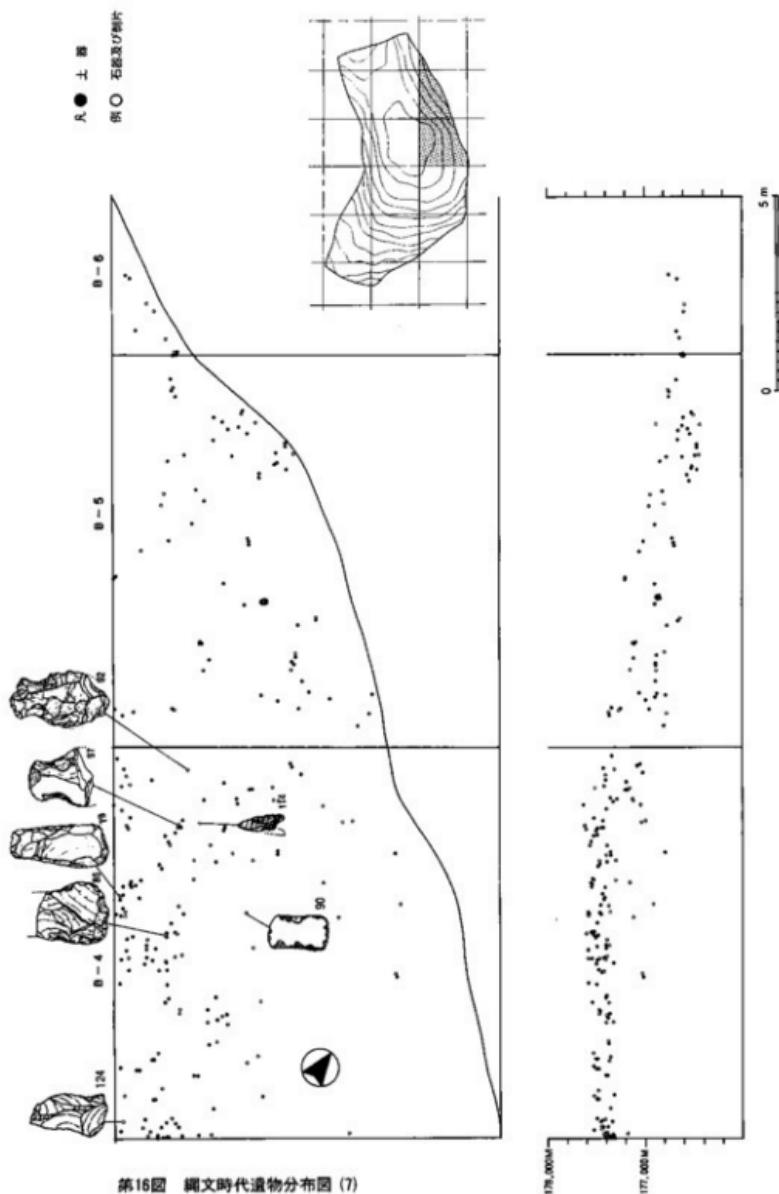
第13図 縄文時代遺物分布図(4)



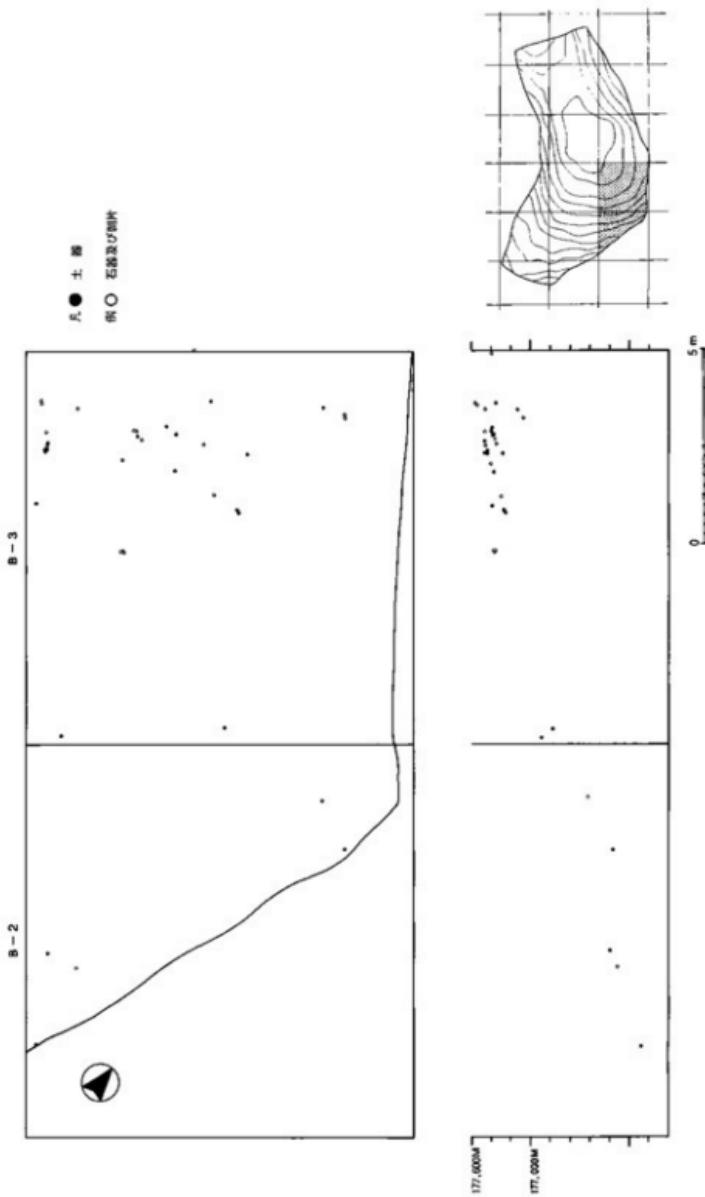
第14図 繪文時代遺物分布図(5)



第15図 楠文時代遺物分布図 (6)



第16図 縄文時代遺物分布図(7)



第17図 縄文時代遺物分布図(8)

(2) 土器

大原天子遺跡から出土した縄文土器は総数831点におよぶ。そのほとんどは晩期のもので、山ノ寺～夜臼式にあたる。その手法の特徴から大きく粗製土器と精製土器に分け、さらに残存部、形態の特徴をもとに細分をおこなった。(第3表・第4表「縄文土器観察表」)

粗製土器 (第18図～第23図)

貝ガラ調整や横ナデなどの粗い調整を施した土器群で、深鉢型が多い。口縁部をA～E類、底部をF～I類に分類した。

A類 (第18図～第19図29、第20図31～36)

口縁部が直口するものをA類とした。形態別にa～c類に細分した。

A a類 (第18図～第19図19)

口縁がゆるく外反し、口唇が立ち上がるか、わずかに内湾する

A b類 (第19図20～28)

口唇がわずかに外反するもの。

A c類 (第19図29、第20図31～36)

口縁が大きく外反するもの。

B類 (第19図30)

口縁外側に刻目突帯を有するもの。

C類 (第20図37～第21図42)

波状口縁を持つもの。形態によりa～c類に細分できる。

C a類 (第20図39)

A a類と同じく、口唇がわずかに内湾するもの。

C b類 (第21図41)

口唇がわずかに外反するもの。

C c類 (第20図37, 38, 40、第21図42)

口縁が大きく外反するもの。

D類 (第23図63)

口縁上部にリボン状の突起を持つもの。

E類 (第21図43, 44)

口縁外側に突帯を有するもの。

F類 (第21図42, 45～第22図56)

底部端が張り出すもの。

F a 類（第21図45, 48, 49, 51～53, 第22図56）

底部がほぼ平底のもの。

F b 類（第21図42, 46, 第22図50, 55）

底部がやや上げ底のもの。

F c 類（第22図54）

底部が丸底のもの。

G 類（第22図57, 58）

胴部から底部端にかけてほぼ直線的につらなるもの。

H 類（第22図59, 60）

胴部から外反しほば垂直に底部端につらなるもの。

I 類（第23図63）

丸底で、底部から口縁にかけてゆるい弧をなしてつらなる。

胴部（第21図42、第22図61, 62）

稜をなして内傾する肩部とゆるく外反する頸部を持つ。第21図42は肩部にリボン状の粘土帯を貼り付けている。

精製土器（第24図、第25図）

研磨がなされている土器群で、浅鉢型をなすものが多い。口縁形態により J～O 類に分類できる。

J 類（第24図64）

直口口縁の外側に肥大した突唇を持つ。

K 類（第24図65）

口縁が直立気味に立ち上がり、口唇が少し外傾する。口唇内側に沈線を持つ。

L 類（第24図66～72）

胴部から頸部にかけて内湾し、頸部から口縁にかけて外傾するもの。a～c 類に細分される。

L a 類（第24図66, 67）

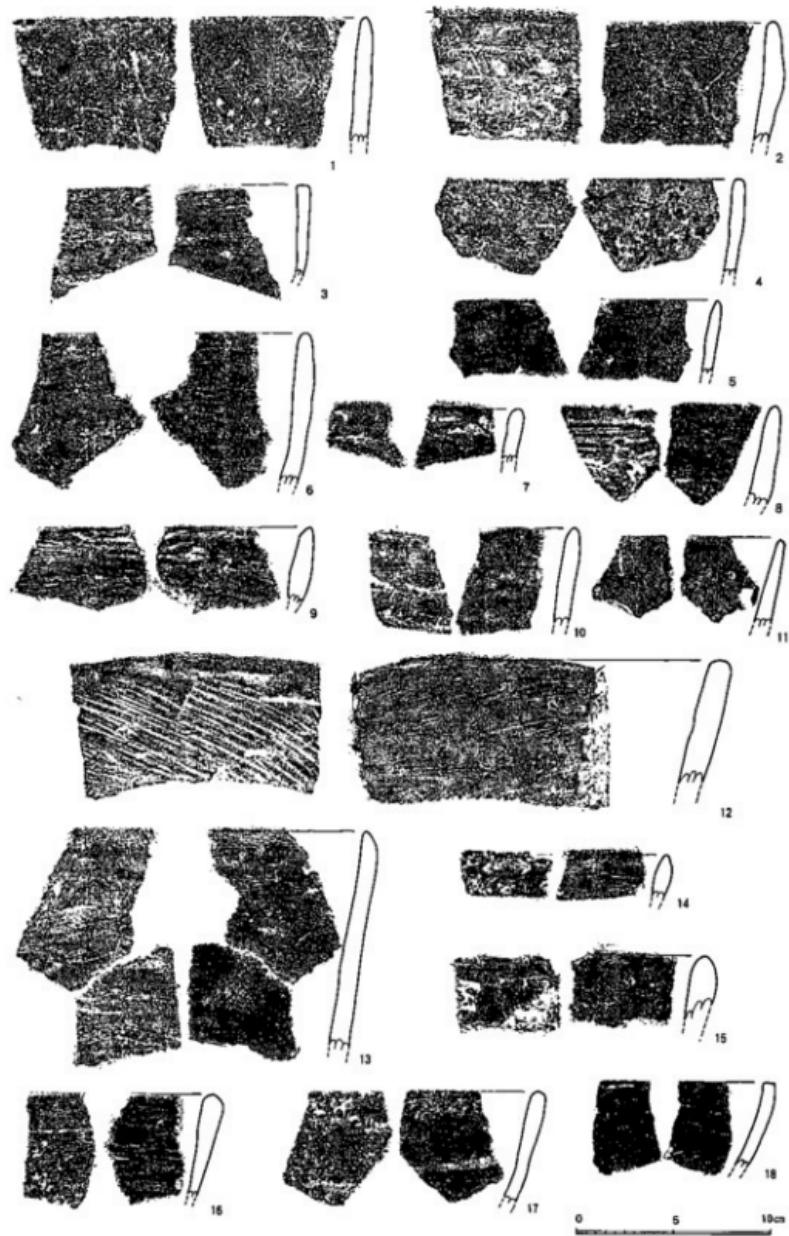
頸部の屈曲がゆるい「く」の字状を呈し、あまり内側に張り出さないもの。胴部もあまり張り出さない。

L b 類（第24図68）

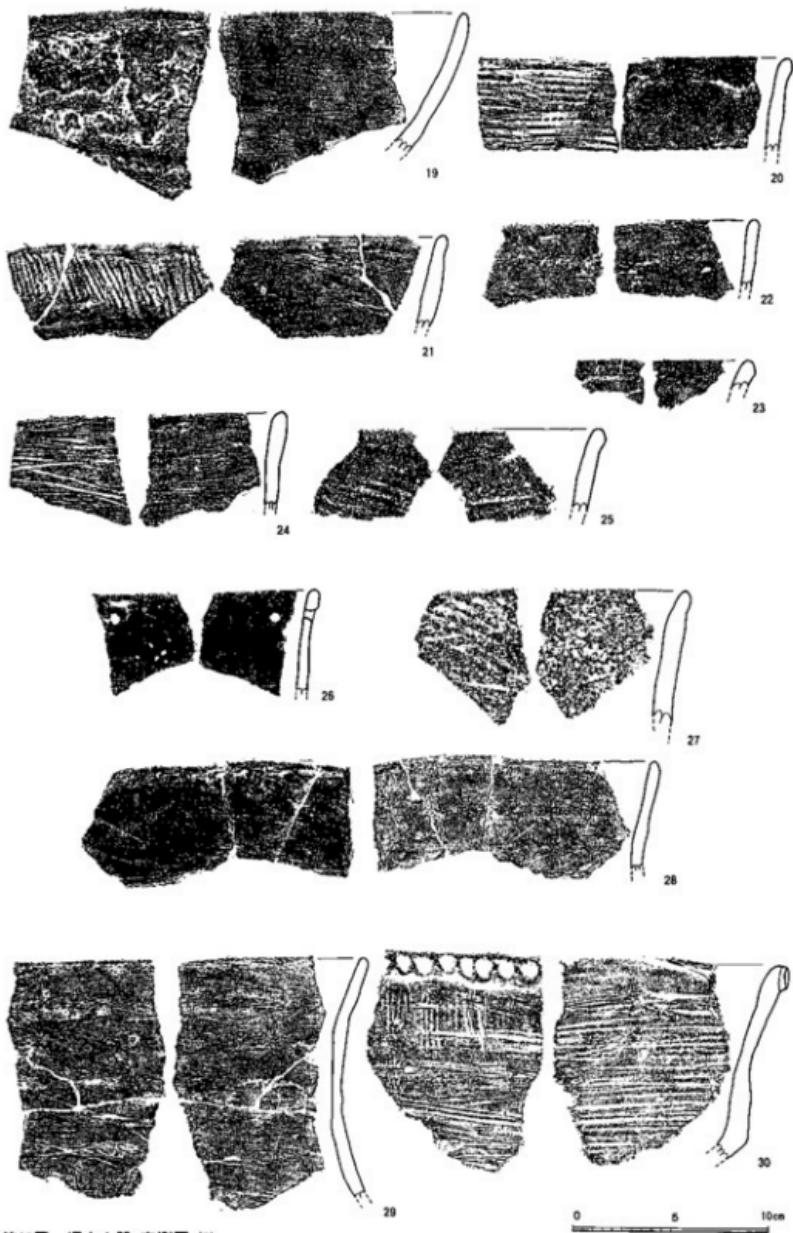
胴部の張りがやや強く、頸部の屈曲が内側に張り出しているもの。口縁は薄めで、上面にくぼみを持つ。

L c 類（第24図69～72）

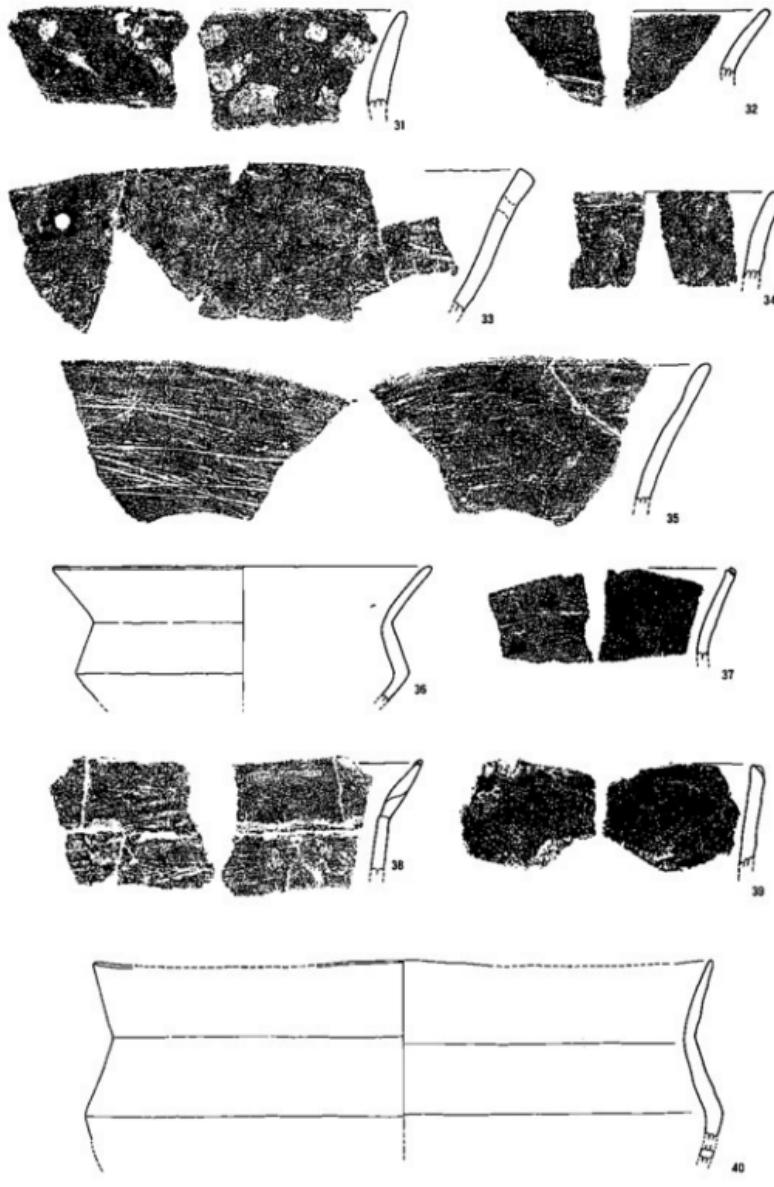
胴部が強く張りだし、やや厚い口縁を持つもの。口縁上面にくぼみを持つもの（69, 71）、



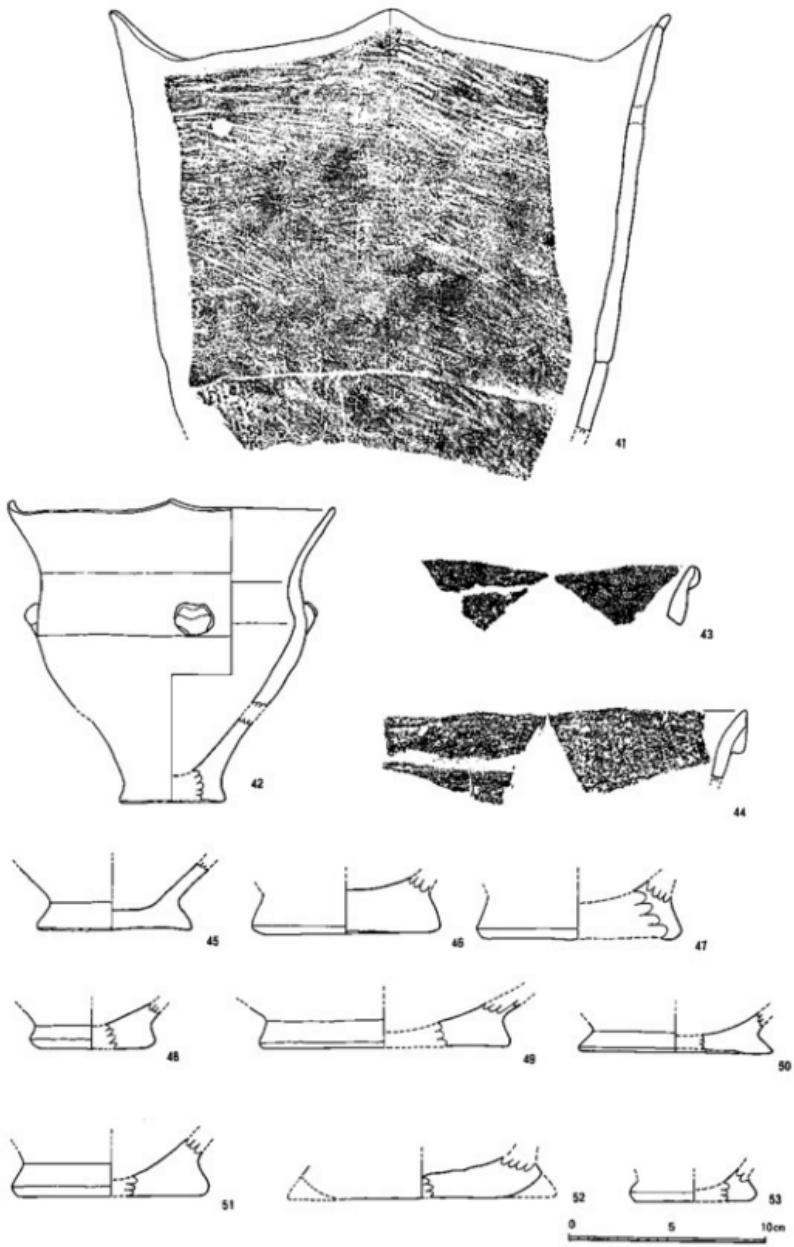
第18図 繩文土器 実測図(1)



第19図 繩文土器 実測図 (2)



第20図 繩文土器 実測図 (3)



第21図 繩文土器 実測図 (4)

段をなすもの (70, 72)がある。また71は口唇下部に沈線を持つ。

M類 (第24図73)

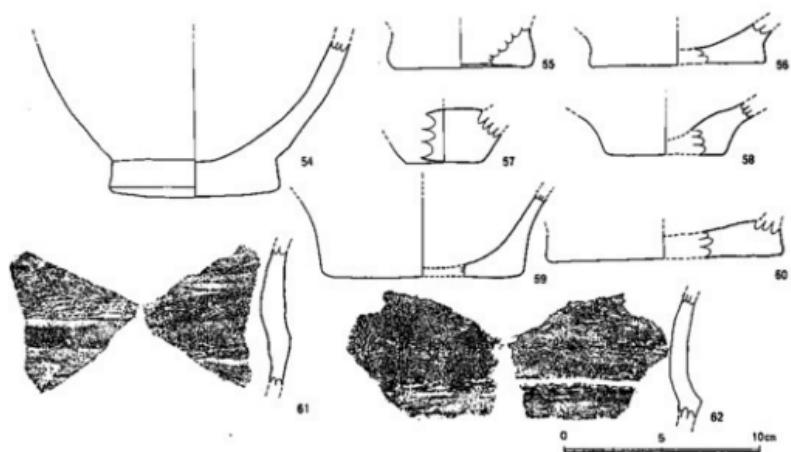
肩部から内傾し、頸部で大きく外反する。口縁は薄く、内面に沈線、外面に突帯を持つ。

N類 (第24図74)

肩部で稜をなして内傾し、頸部で強く外反する。口縁上面と下面にそれぞれくぼみをもつ。

O類 (第25図)

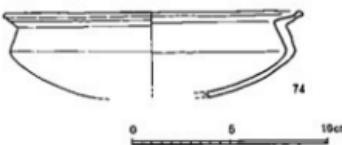
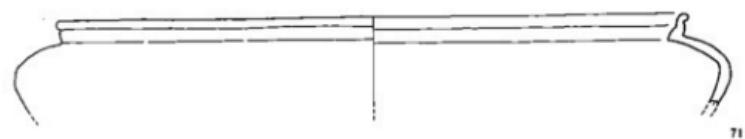
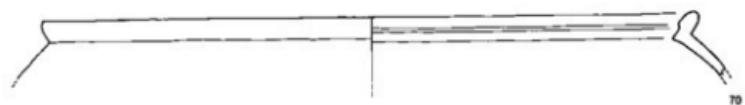
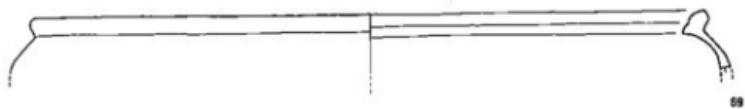
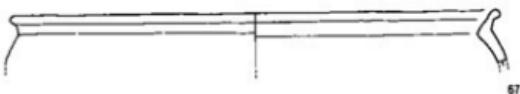
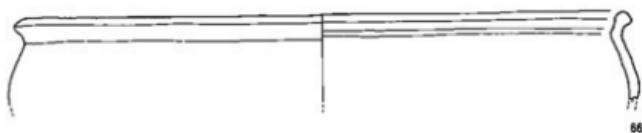
肩部と頸部で稜をなして屈曲するもの。口縁はやや厚い。76は口縁上面にくぼみをもつ。



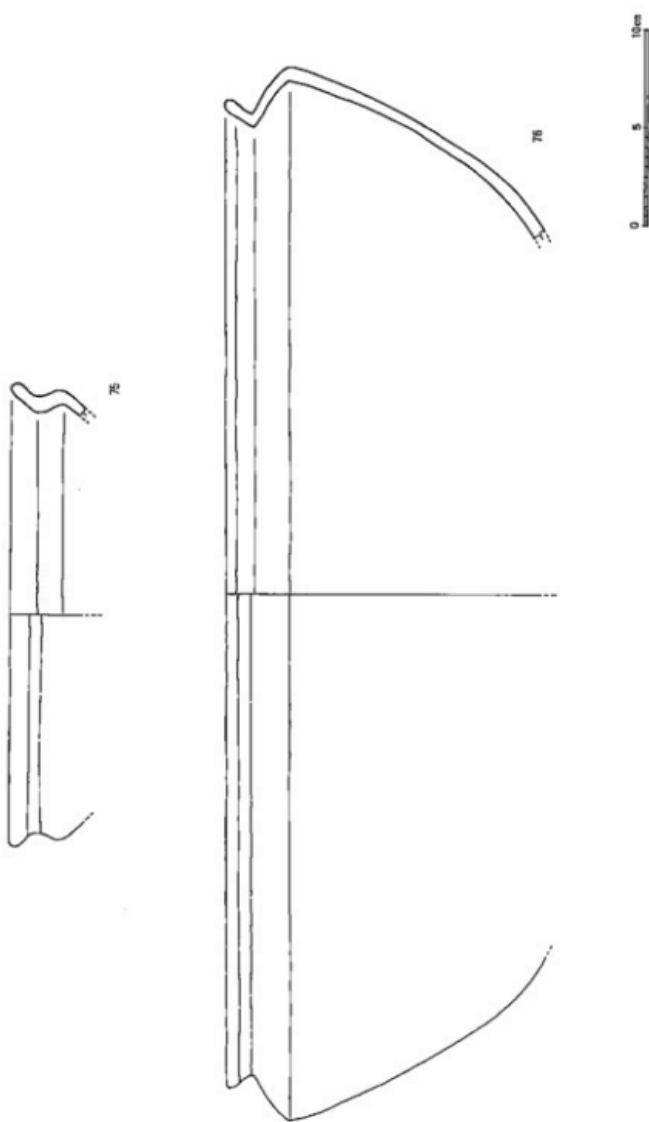
第22図 繩文土器 実測図 (5)



第23図 桐文土器 実測図 (6)



第24図 橢文土器 実測図 (7)



第25図 繩文土器 実測図 (8)

第3表 繩文土器観察表(1)

(*は復原値)

番	図版	種類	器種	残存 部位	分類	出土地点	法量(cm)		色調		胎	焼成	調整		備考	
							口底径	器高	腹厚	内	外		内	外		
1	18	粗製	鉢	口縁部	A a	一括			0.6	暗黄褐色	暗褐色	やや密	不良	横ナデ	横ナデ	
2	"	"	"	"	"	B-5.25			1.1	黄褐色	黄褐色	"	やや良	"	"	外側にスス付着
3	"	"	"	"	"	B-4.42			0.7	赤褐色	赤褐色	密	"	"	"	口縁上端が面をなす
4	"	"	"	"	"	B-2.6			0.7	暗黄褐色	暗灰色	粗	不良	ナデ	ナデ	
5	"	"	"	"	"	37, 108			0.6	黒褐色	黒褐色	密	やや良	横ナデ	横ナデ	
6	"	"	"	"	"	287, 38			1.1	暗黄褐色	赤褐色	やや密	"	横ナデ	"	
7	"	"	"	"	"	B-3.23			0.8	黑色	黄褐色	粗	"	"	"	
8	"	"	"	"	"	C-3.38			1.1	赤褐色	赤褐色	やや密	良	跡付	跡付	
9	"	"	"	"	"	C-3.21			1.1	赤褐色	暗赤褐色	"	やや良	"	"	
10	"	"	"	"	"	C-5.191			0.9	黄褐色	明黄褐色	密	"	横ナデ	横ナデ	
11	"	"	"	"	"	37, 56			0.7	赤褐色	赤褐色	粗	良	"	"	
12	"	"	"	"	"	B-4.166			1.4	"	暗黄褐色	やや密	やや良	"	跡付	
13	"	"	"	"	"	B-3.21			1.0	黑色	"	粗	不良	"	横ナデ	
14	"	"	"	"	"	B-5.85			0.8	"	暗赤褐色	"	やや良	"	"	
15	"	"	"	"	"	37, 20			1.4	赤褐色	赤褐色	密	"	"	"	
16	"	"	"	"	"	B-4.92			1.2	"	暗黄褐色	粗	良	跡付	"	
17	"	"	"	"	"	C-2.6			0.9	"	暗赤褐色	やや密	"	横ナデ	"	
18	19	"	"	"	"	B-5.36			0.7	暗黄褐色	暗黄褐色	密	やや良	"	"	口縁上端が面をなす
19	"	"	"	"	"	37, 41			0.8	黄褐色	黒褐色	やや密	良	"	"	外面にスス付着
20	"	"	"	"	A b	C-5.220			0.8	"	黄褐色	密	やや良	跡付		
21	"	"	"	"	"	C-5.41			0.9	赤褐色	赤褐色	密	良	"	"	
22	"	"	"	"	"	B-4.46			0.6	赤褐色	暗黄褐色	やや密	"	"	横ナデ	
23	"	"	"	"	"	一括			0.8	黄褐色	黄褐色	"	やや良	ナデ	ナデ	
24	"	"	"	"	"	B-4.212			0.9	黑色	黑色	密	良	跡付	跡付	
25	"	"	"	"	"	一括			0.8	黄褐色	赤褐色	"	"	"	"	
26	"	"	"	"	"	B-5-一括			0.6	"	暗黄褐色	やや密	"	横ナデ	横ナデ	補修孔あり
27	"	"	"	"	"	一括			1.0	"	"	やや良	跡付	跡付		
28	"	"	"	"	"	C-5.125			0.7	赤褐色	暗赤褐色	"	"	横ナデ	横ナデ	
29	"	"	"	"	A c	37, 52			0.6	黑色	赤褐色	"	"	"	"	
30	20	"	"	"	B	C-5.26			1.1	明黄褐色	黄褐色	"	跡付	跡付	口縁に刻目実帯	
31	"	"	"	"	A c	一括			1.1	黄褐色	暗黄褐色	"	"	横ナデ	横ナデ	
32	"	"	"	"	"	487-一括			0.7	赤褐色	暗赤褐色	"	"	"	"	
33	"	"	"	"	"	27, 19			1.0	暗赤褐色	"	粗	良	"	ナデ	埋め物付 裸跡
34	"	"	"	"	"	B-5.96			0.8	明黄褐色	黄褐色	密	やや良	"	横ナデ	
35	"	"	"	"	"	C-4.152			0.7	黒褐色	赤褐色	粗	やや良	横ナデ	跡付	
36	"	"	浅鉢	"	"	487上層	15.54		0.5	黑色	黑色	"	"	"	"	波状口縁
37	"	"	"	"	C c	C-4.216			0.6	赤褐色	赤褐色	密	良	横ナデ	横ナデ	波状口縁
38	"	"	"	"	"	C-4.117			0.7	暗褐色	暗褐色	やや密	やや良	"	"	波状口縁

第4表 繩文土器観察表(2)

(*は復原値)

號	図版	種類	器種	残存 部位	分類	出土地点	法量(m)		調査		胎土	焼成	調査		備考	
							口径	器高	壁厚	内	外		内	外		
39	"	"	"	"	C a	C-2.11		0.8	黒褐色	黄褐色	やや密	不良	"	断面計	波状口縁	
40	"	"	"	"	C c	4狩中縫	32.2	0.9	"	暗褐色	"	"	"	"	波状口縁	
41	21	"	"	"	C b	3狩, 107	29.0	1.0	"	暗褐色	やや密	やや良	断面計	"	波状口縁 極目あり	
42	"	"	深鉢	口・底	G・N	2狩, 17	16.9	15.5	0.9	明黄褐色	明黄褐色	密	良	"	横ナデ	
43	"	"	"	口縁	E	3狩一括		0.9	黒褐色	"	粗	不良	"	"	口縁外側に突帯	
44	"	"	"	"	"	C-4.90		0.7	"	黄褐色	やや密	不良	"	"	口縁外側に突帯	
45	"	"	"	底部	F a	一括	7.9	0.6	暗黄褐色	"	"	"	"	"	くびれ部に指痕	
46	"	"	"	"	F b	一括	9.8		黄褐色	赤褐色	"	"	"	"	"	
47	"	"	"	"	F	一括	10.6		反白色	黄褐色	"	"	"	"	"	
48	"	"	"	"	F a	D-2.70	6.34		黒褐色	暗褐色	粗	不良	"	"	"	
49	"	"	"	"	"	D-5.15	13.0		灰白色	明黄褐色	やや密	やや良	"	"	"	
50	"	"	"	"	F b	C-4.148	10.0		明黄褐色	明黄褐色	粗	"	"	"	"	
51	"	"	"	"	F a	C-4.一括	10.24		"	赤褐色	やや密	"	"	"	"	
52	"	"	"	"	"	一括			灰褐色	黄褐色	粗	不良	"	"	"	
53	"	"	"	"	"	4狩一括	6.54		黒褐色	暗褐色	粗	やや良	"	"	横ナデ	
54	22	"	"	"	F c	3小土坑	8.8	1.0	灰褐色	赤褐色	やや密	"	横ナデ	"	くびれ部に指痕	
55	"	"	"	"	F b	C-4.49	7.64		不明	黄褐色	やや密	"	不明	横ナデ	"	
56	"	"	"	"	F a	4狩	9.0		黒色	赤褐色	粗	"	断面計	"	"	
57	"	"	"	"	G	B-4.230	3.94		暗赤褐色	黄褐色	"	"	"	ナデ	ナデ	
58	"	"	"	"	"	C-5.81	6.34		暗褐色	赤褐色	やや密	"	横ナデ	横ナデ	"	
59	"	"	"	"	H	C-5.175	10.54	0.6	明黄褐色	"	"	"	断面計	断面計	"	
60	"	"	"	"	"	B-4.80	12.24		黄褐色	"	粗	不良	ナデ	ナデ	"	
61	"	"	鉢	底部	D-5-一括			1.2	黄褐色	暗黄褐色	"	やや良	断面計	断面計	"	
62	"	"	"	"	D-4.192			1.0	黒褐色	暗赤褐色	やや密	"	横ナデ	横ナデ	"	
63	23	"	浅鉢	口・底	D l	C-5	59.3	17.14	0.9	"	"	"	やや良	断面計	断面計	口縁上部にリボン状変形、器上部
64	24	精製	鉢	口縁	J	2狩, 29		0.4	黒褐色	黒褐色	"	不良	ナデ	横ナデ	"	
65	"	"	"	"	K	B-5.65		0.3	黄褐色	黄褐色	密	やや良	磨研	磨研	"	
66	"	"	"	"	L a	C-4.158	31.94	0.5	灰褐色	黄褐色	"	"	横ナデ	横ナデ	"	
67	"	"	"	"	4狩上縫	25.44		0.6	黒色	黒褐色	"	"	磨研	磨研	"	
68	"	"	"	"	L b	B-1.15	19.54	0.5	黄褐色	黄褐色	"	"	"	"	"	
69	"	"	"	"	L c	B-4.181	35.04	0.5	暗黄褐色	黒褐色	"	"	横ナデ	"	"	
70	"	"	"	"	"	C-5.26	33.84	0.5	黒褐色	暗黄褐色	"	"	磨研	"	"	
71	"	"	"	"	"	2狩, 62	32.64	0.5	"	黒褐色	"	"	横ナデ	"	"	
72	"	"	"	"	"	C-4.164	31.54	0.5	灰白色	灰白色	"	"	磨研	"	"	
73	"	"	"	"	M	4狩一括	17.24	0.4	暗黄褐色	赤褐色	"	良	"	"	"	
74	"	"	鉢	"	N	一括	23.74	0.8	黒褐色	黒褐色	やや密	"	"	"	"	
75	25	"	"	"	O	4狩	19.54	0.8	黒褐色	暗褐色	やや密	"	横ナデ	"	"	
76	"	"	"	"	"	C-3.15	50.84	0.6	黄褐色	黄褐色	"	"	横ナデ	"	一部に赤色顔料	

(3) 石器

大原天子遺跡から出土した石器は、明らかに加工の見られる遺物の総数で90点にのぼる。その内訳は、石斧が25点（打製石斧15点、有肩石斧9点、磨製石斧1点）、敲石・磨石6点、楔状石器2点、十字形石器1点、石鎌4点、使用痕のある剥片8点、石器未成品25点、石器素材17点、石核1点、その他の石器1点となっている。

これらの出土した石器・石製品について、「石器観察表」（第5表・第6表）によって観察結果をまとめると、器種別に見られる特徴について述べてみたい。

打製石斧

砂岩を主原料として製作された打製石斧であり、出土総数15点を数える。そのほとんどは、球磨川の河原から採集してきたやや小さめの母岩から、縦長あるいは、横長剥片を取り、片面を加工した後にさらに刃部等を加工したものである。

打製石斧の分類は、①分銅型②短冊型③バチ型の3つに分類するのを通例とするが、当遺跡から出土した遺物は、ほとんどが②の短冊型の分類に該当するようである。ただ細かく見ると、およそ2形態に分類することができる。

(1)側面がやや刃部にかけてふくれる細長タイプのもの（77～88）、(2)全体的に小振りの小型タイプ（89～91）との二通りである。

この両者の用途の違いなどは明確ではないが、出土した遺物は、いずれも刃部が片減りしているものが多く、また欠損しているものが多いことなどから、多くは土掘り具として石鎌のような用途で使用されたものであろうと推定している。

有肩石斧

有肩石斧は、9点の出土である。有肩石斧は、いわゆる「打製石斧」の一類型であろうが、ここでは別のものとして取り上げた。

さて有肩石斧は、柄に装着の目的のためか基部に深いえぐりの見られるのが特徴であり、乙益重隆氏によれば、「両耳型」「凸字型」「広刃型」「靴型」の4つに分類されている。当遺跡から出土した遺物は、氏の分類の「両耳型」に含まれるが、さらに細かく見ると、えぐりの程度により、2通りに分けられそうである。①えぐりが深く、いかり肩になるもの（92～96）、②えぐりが浅く、なで肩になるもの（97～100）である。

なお当遺跡で出土した、有肩石斧は欠損が激しく完形に近いものは認められない。おそらく激しい使用に伴うためと考えられ、この石器の使用法を類推させる一つの手がかりとなるのではないかと考えている。

なお、この有肩打製石斧は、従来は弥生時代の焼畑とともになう遺物とされていたが、当

遺跡が縄文時代晚期の単純な遺跡としての性格を持つことからすれば、有肩石斧の製作時期の上限もおのずと縄文時代晚期にさかのぼることになろう。

敲石・磨石

第29図掲載のものである。敲石と磨石とは、本来区別されるべきものであるが、当遺跡から出土したものは、形状においてはことなるものの、どちらにも摩耗痕や、敲打痕の残るもののが見られるなど、両者の区別ははっきりとはしない。このうち、主に敲石として使用されたらしいものが、101・102である。一方、磨石として使用されたものが103～105である。また、磨石と同時にくぼみ石として使用されたらしいのが、106である。なお、調査区のほぼ中央部からは、4基の貯蔵穴状の遺構が検出されているが、それとのかかわりにつき注目すべきであろう。

十字形石器

109は、全体の形状は不明であるが、おそらくは十字形石器の端部であろうと推測される遺物である。なお、十字形石器らしき遺物の出土は、この1点のみである。

磨製石斧

磨製石斧は1081点のみの出土である。形状は小型で、全面を研磨してある。なお、刃部は、やや片刃に近い両刃である。

楔形石器

いわゆる楔形石器に近いものが、112である。砂岩の横長剥片に、ほぼ全方向から二次加工を施し、刃部を形成している。側面には使用によるツブレが少々認められ、使用されたことが分かる。なお111は、形状は112によく似たものであるが、石質や厚みなどが異なり、スクレーパー状に使用されたものと理解している。

石鏃

石鏃は、全部で4点の出土である。115がチャート製によるもののはかは、いずれも腰岳系の黒曜石で作られている。出土点数は少ないが、114の長形、113、115の中形、116の小型タイプなどいくつかのバリエーションに分かれるようである。なお、黒曜石は遺跡に比較的近い鹿児島県大口周辺の気泡の入るタイプは、剥片としては多数採集されているものの、製品としての加工例は認められなかった。

使用痕ある剝片

117～124の8点であり、いずれも使用に伴う痕跡を認めることができる。122がチャート製であることを除けば、いずれも黒曜石製の剝片である。なお、この剝片も石鎚と同様に118のみが桑ノ木津留周辺の所産であることを除けば、腰岳系のものである。

石核

125は黒曜石の石核である。石材は、日東系のもので、内部に多量の気泡を含む。なお、南九州からもたらされた黒曜石の素材は、剝片は数点が認められるが、いずれも剝片としての域を出ていないものが多く、石鎚等の製品は北九州からもたらされた石材を加工しているのが特徴である。

石器未成品

石器の未製品には大別して打製石斧と楔形石器の2通りが認められる。126～147までが、打製石斧の未製品であり、148～150が楔形石器の未製品である。いずれも、調整が粗く、加工途中で欠損し廃棄されたと思われるものや、二次加工が不十分で製品としての使用が不可能なものなどがある。なお、この石器未製品と次の石器素材とを検討すれば、石器製作の工程をほぼたどることができそうである。

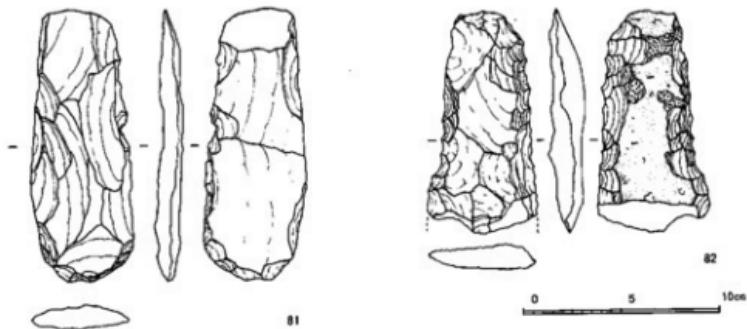
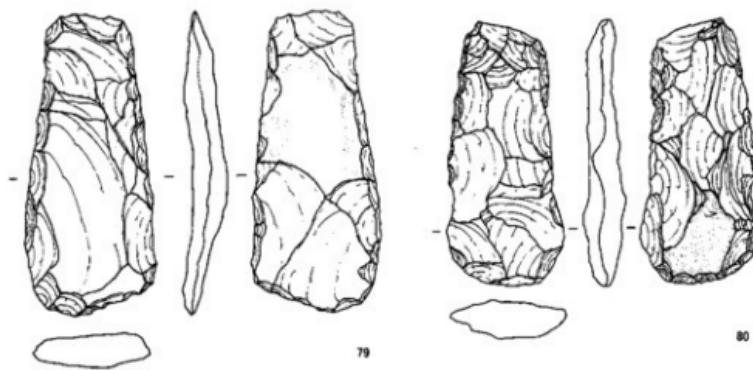
なお107は、石皿を転用した磨製石斧の未製品である。縄文時代晩期のものとしては、大きさなどやや特異ではあるが、全面に敲打面があることなどから、研磨を行う以前の粗調整の段階で廃棄された遺物であると理解している。

石器素材等

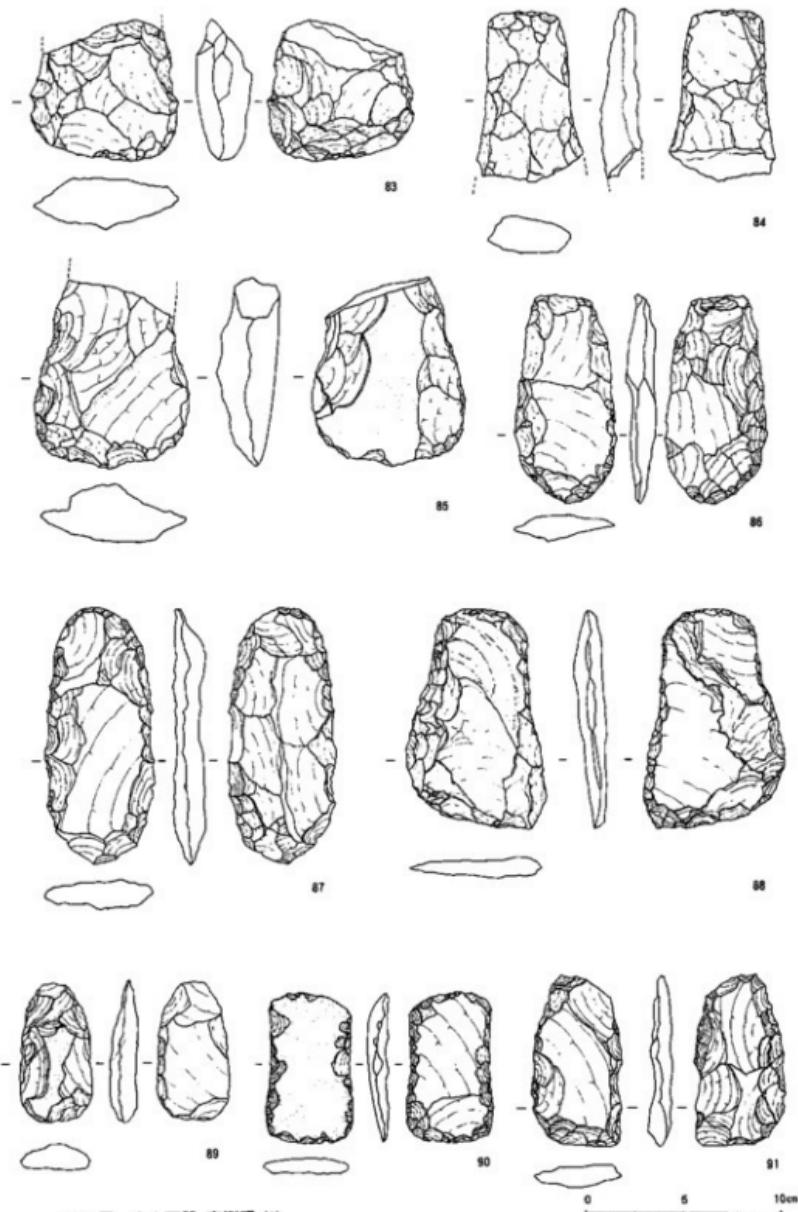
石器素材のうち151～154が打製石斧の素材、また155～157が楔状石器の素材と思われるものである。いずれも、砂岩の母岩から縦長剝片を採取し、二次加工を加える前のものである。石器素材はこのほかにも多くの出土があるが、その多くは球磨川の河原などに分布する直径20～30cm自然石を母岩としている。当遺跡で作られた石器もそのほとんどが、この素材の段階で供給されたものを加工して製作されたものであろう。なお、例外的に154のみは、石皿として使用されていたものを転用し、石器素材として整えたものである。一部に石皿として使用された際の摩耗痕が残っている。

その他の石器

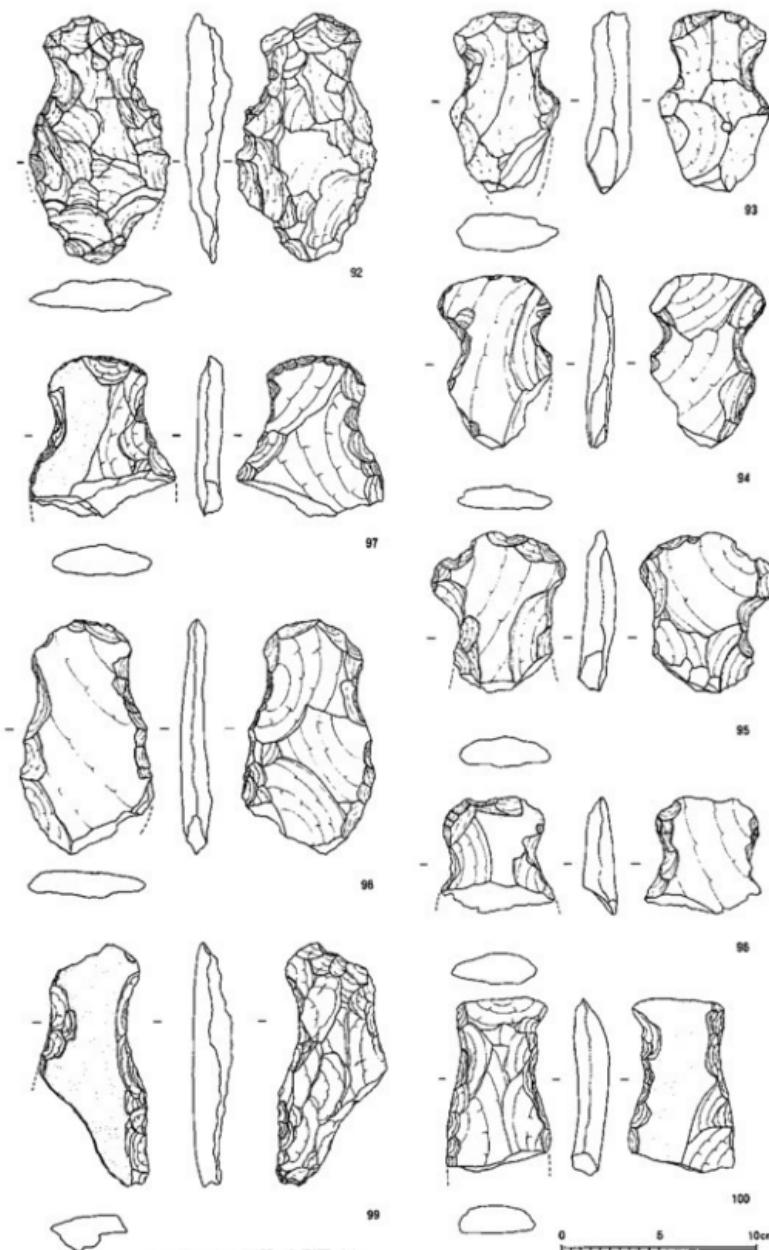
110は、特異な形を呈している。石製の収穫具に形態的にはやや類似しているが、厚みの点で異なる。ここでは異形の打製石斧であるとしておきたい。



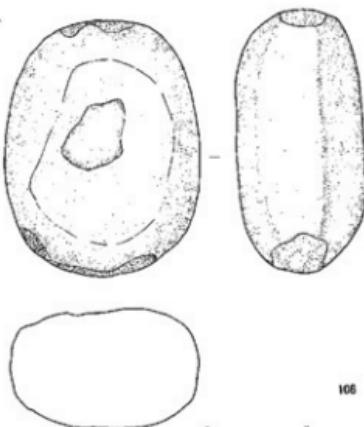
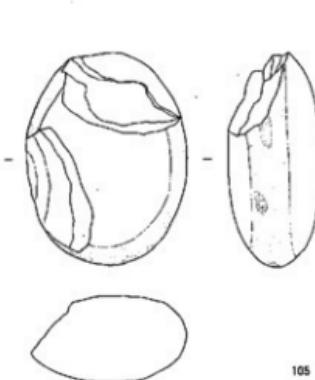
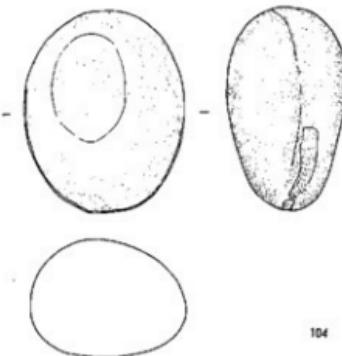
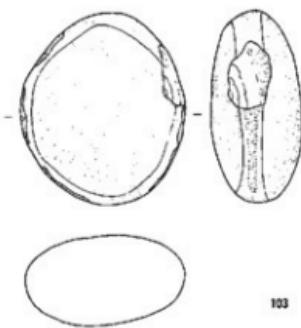
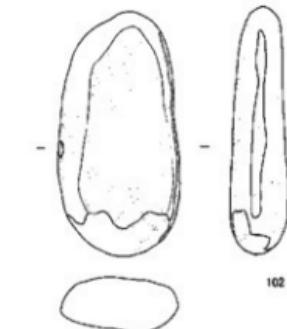
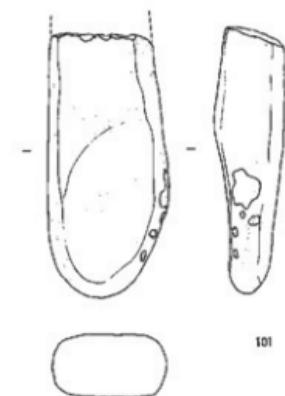
第26図 出土石器 実測図(1)



第27図 出土石器 対測図(2)

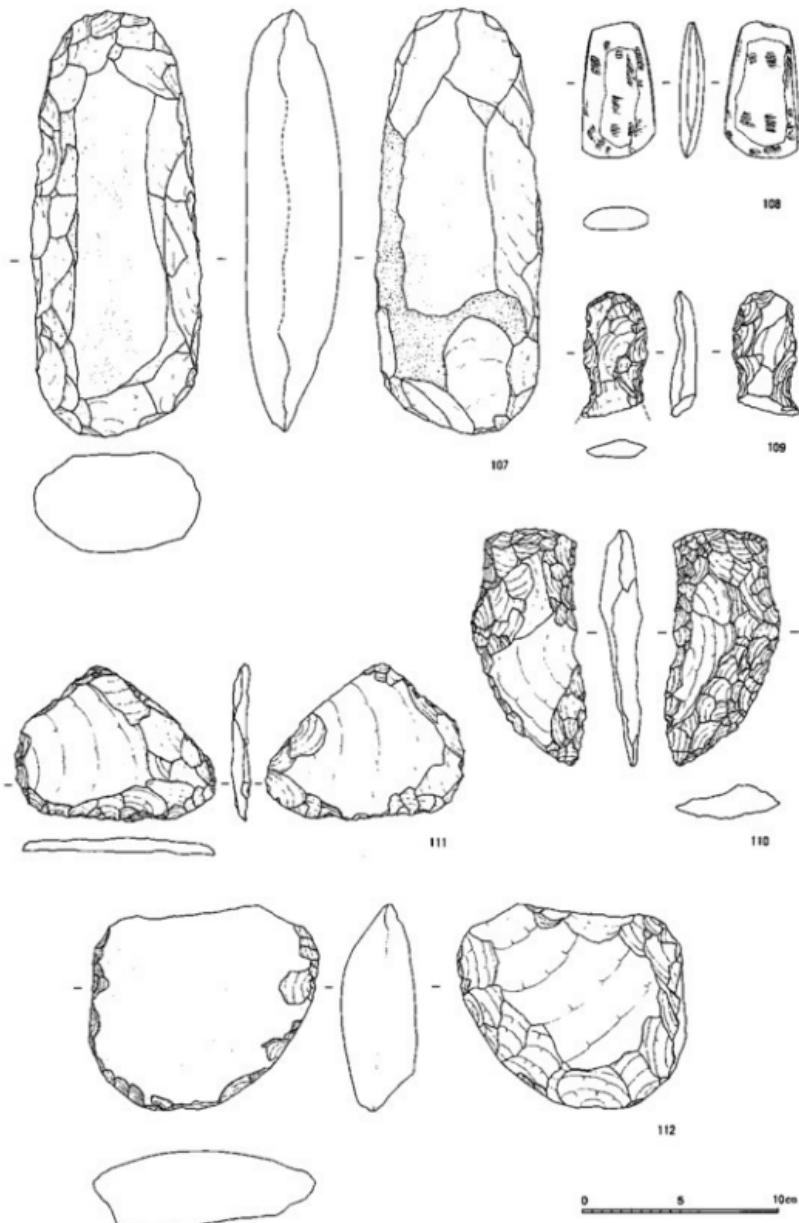


第28回 出土石器 実測図(3)

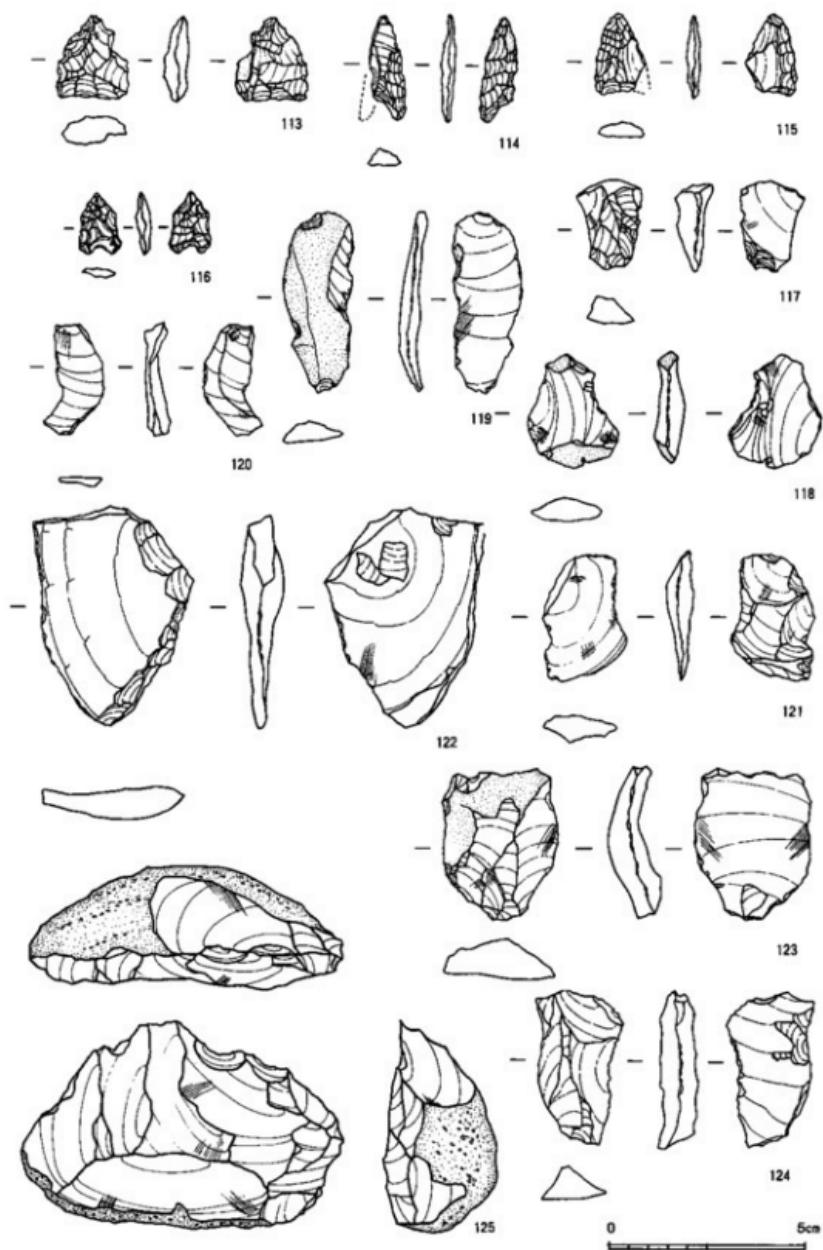


0 5 10cm

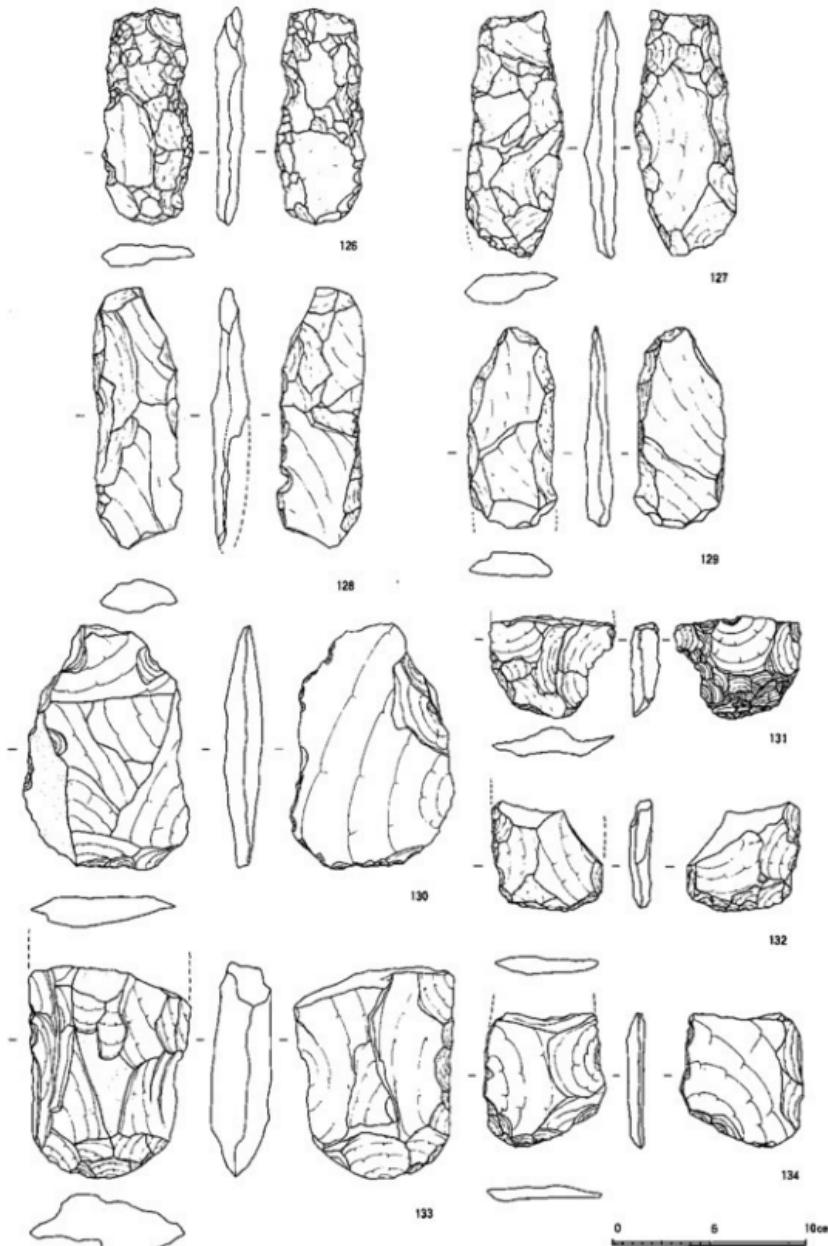
第29回 出土石器 實測圖(4)



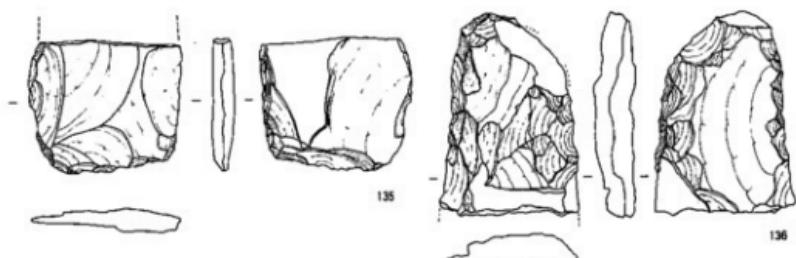
第30図 出土石器 実測図(5)



第31回 出土石器実測図 (6)

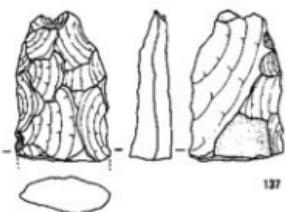


第32図 出土石器 実測図(7)



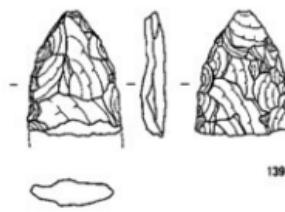
135

136



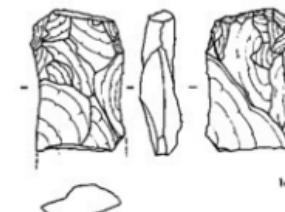
137

138



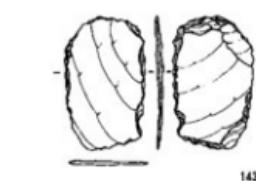
139

140



141

142

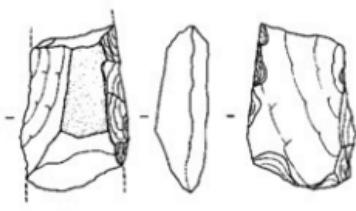


143

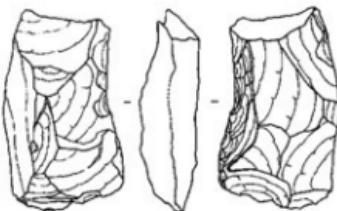
144

0 5 10cm

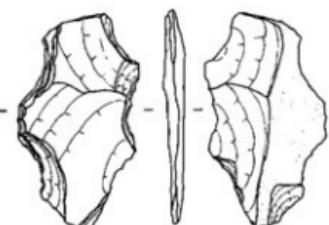
第33図 出土石器 實測図 (6)



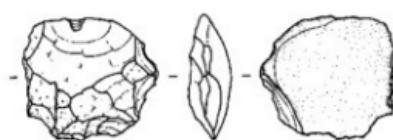
145



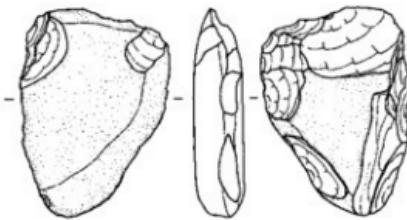
146



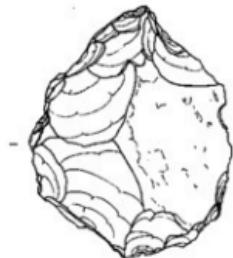
147



148



149

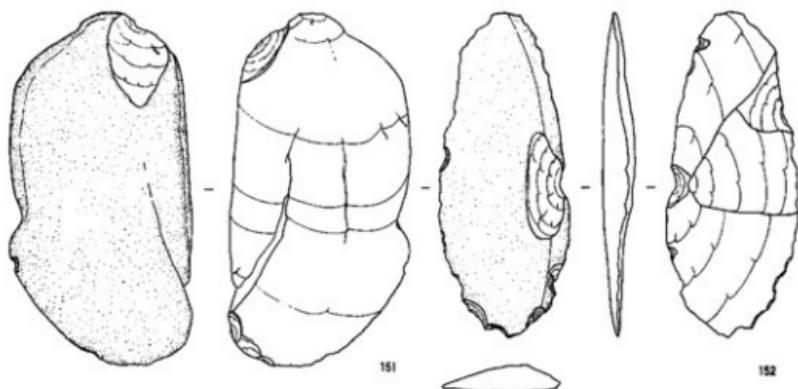


150



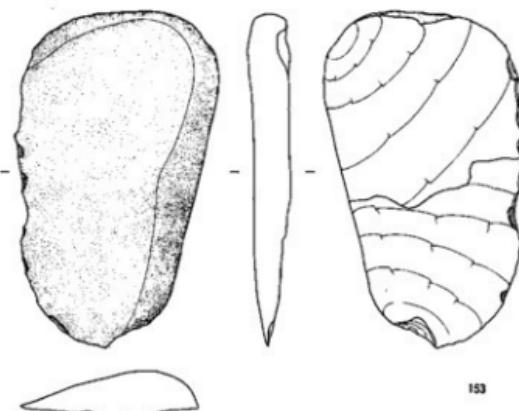
0 5 10cm

第34図 出土石器 実測図(9)

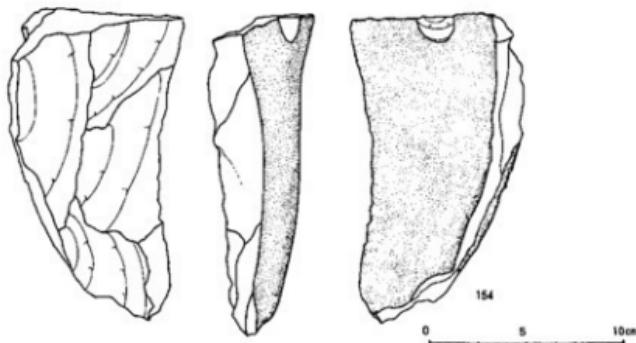


151

152



153

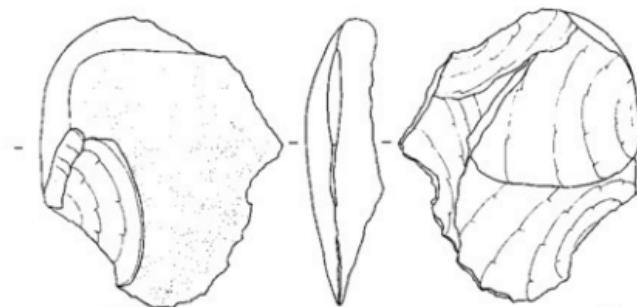


0

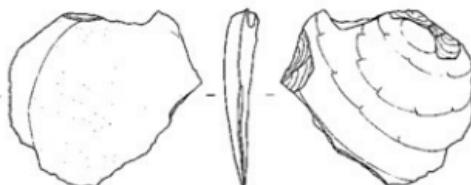
5

10cm

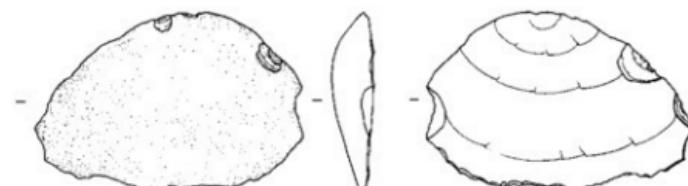
第35回 出土石器 実測図 10



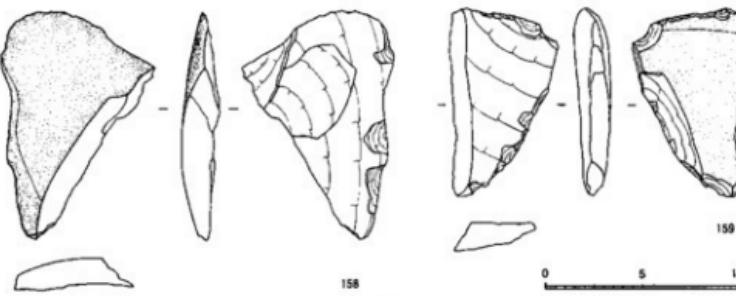
155



156



157

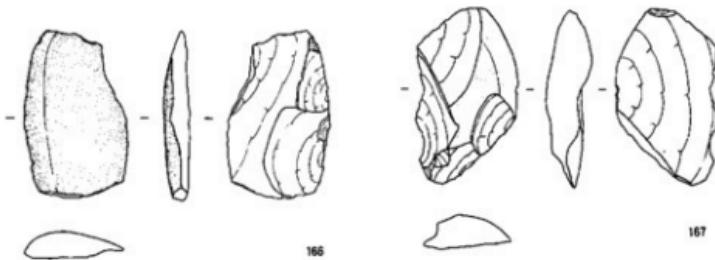
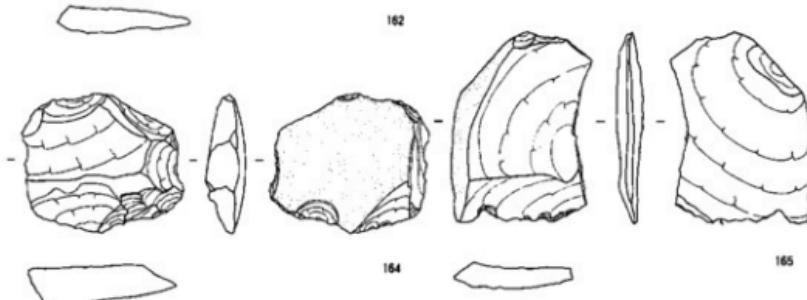
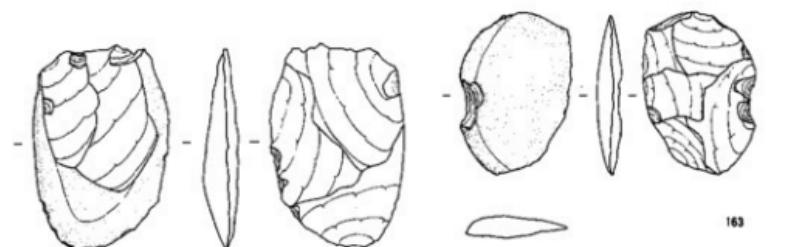
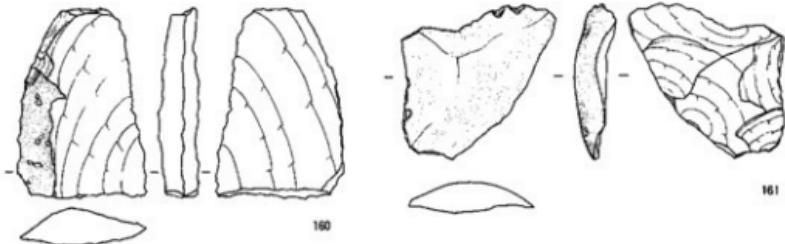


158

159

0 5 10cm

第36圖 出土石器 實測圖 (1)



0 5 10cm

第37図 出土石器 実測図 (1)

石材について

石器の石材であるが、遺跡周辺の石材の分布は、「球磨川流域の石器石材分布図」(第38図)に示した。当遺跡は、球磨川の現河道から直線で、約1200mの位置にあるが、石材は黒曜石などを除けば、ほとんど球磨川の川原から採集したらしい直径20~30cm程度の砂岩が主体である。調査区内で、そうした母岩が見つからないところを見ると、おそらくは母岩の採取地でおおまかに割り、打製石器については151~153を、楔状石器については155~157の剥片を、素材の状態のまま石器の消費地である当遺跡へ搬入し、その都度加工して使用していることが推測される。このことは当時の石器の製作と利用のあり方を考える上で非常に興味深い。

なお当遺跡で見られる黒曜石の産地については大きく二通りに分けることができる。①(北部九州)腰岳系、②(南九州)白浜、桑ノ木津留、五女木、狸々、日東系などであり、各地より石材が搬入されていることが知られる。しかも、剥片それ自体は両系ともに見られるが、石鎚や使用痕のある剥片には、南九州系のものでは透明感があり良質の桑ノ木津留産のものが1点見られるほかは、ほとんど北部九州の腰岳系のものを使用しているのが特徴である。

以上出土した各種石器類は、当遺跡が山の寺式土器の時期のほぼ単純な遺跡であることから、その時期の一つの石器組成を示すものとなり得よう。また当遺跡の場合、さらに興味深いのは、「製品」のほかに石器の未成品や素材が多く見受けられることである。このことは、石器製作の大まかな過程をたどる一つの目安となるほか、当遺跡の性格を考える上で重要であると思う。



第38図 球磨川流域の石器石材分布図

第5表 石器觀察表(1)

(*は現存値)

番号	図版	器種名	石 質	出 土 地 点	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	所 見
77	26	打製石斧	砂 岩	一括	14.3	6.0	2.0	240.71	碧柄直あり 刃部は片彫り 自然面残す
78	"	"	"	C-5. 214	14.3*	6.2	2.6	297.14	碧柄直あり 刃部は欠損 自然面残す
79	"	"	"	B-4. 211	15.4	6.6	1.8	221.05	碧柄直あり 刃部は彫り 自然面残す 全体的に済曲
80	"	"	"	一括	13.5	6.0	2.0	179.55	碧柄直あり 刃部使用痕あり 自然面残す
81	"	"	"	"	13.9	5.1	1.3	113.32	碧柄直あり 自然面残す
82	"	"	"	C-3. 25	11.4	5.7	1.7	129.90	碧柄直あり 刃部欠損 自然面残す
83	27	"	"	C-5. 199	7.2	7.4	2.3	171.66	基部、上端部欠損 刃部に使用に伴うツブレあり
84	"	"	"	C-5. 42	8.6*	5.4	2.6	103.40	碧柄直あり 基部 刃部欠損
85	"	"	"	B-4. 154	9.4*	7.9	3.0	247.90	基部、上端部欠損 厚みを削ぐための敲打痕あり
86	"	"	"	C-5.10	10.6	5.2	1.4	88.60	碧柄直あり 刃部は丸みを帯びる
87	"	"	"	B-4.123	13.0	5.6	1.5	124.60	碧柄直あり 刃部は彫耗す 上端部、刃部ともに丸みを帯びる
88	"	粘板岩	C-4.163		11.2	7.0	1.5	142.60	碧柄直あり 刃部使用による欠損
89	"	"	"	一括	7.1	3.7	1.4	41.30	刃部使用にともなう欠損
90	"	砂 岩	B-4. 60		7.8	4.4	1.1	47.90	碧柄直らしきものあり 刃部ツブレあり
91	"	"	"	C-5.107	8.8	4.5	1.1	54.54	碧柄直らしきものあり 刃部ツブレあり
92	28	有肩石斧	"	B-4. 4	12.6	7.2	2.2	155.10	碧柄直らしきものあり 刃部は欠損す
93	"	"	"	一括	9.1*	5.7	2.7	114.78	碧柄直らしきものあり 上端部にややツブレあり
94	"	"	"	3号小型土坑	8.8*	5.9	1.2	64.40	刃部欠損する
95	"	"	"	一括	8.1*	6.9	1.6	88.81	碧柄直らしきものあり 基部、刃部欠損
96	"	"	"	C-4.155	5.8*	5.2	1.7	54.20	碧柄直らしきものあり 基部、刃部欠損 自然面残す
97	"	"	"	B-4. 26	8.2*	7.5	1.2	90.10	基部、刃部欠損 自然面残す
98	"	"	"	C-6.12	11.9*	6.8	1.5	125.61	側面にツブレあり 刃部欠損 やや弯曲す
99	"	"	"	C-4. 一括	12.4	5.1	2.0	123.38	刃部、基部欠損 自然面残す
100	"	"	"	一括	8.8*	5.4	1.6	97.10	碧柄直あり 刀部欠損 自然面残す、やや凸出す
101	29	敲 石	"	C-4.220	13.4*	6.2	3.6	425.72	側面部敲打痕あり 敲打にともない欠損したるものか
102	"	"	"	一括	12.4	6.3	3.0	340.40	下端部および側面部に敲打痕あり
103	"	磨 石	"	C-5.189	9.7	8.4	4.7	477.00	側面に廣く敲打痕とそれにともなう剝離が残る
104	"	"	"	B-4. 7	10.2	8.2	6.1	693.90	摩耗痕と、側面に敲打痕
105	"	"	"	C-4. 29	10.8	8.2	4.8	478.85	中央部に摩耗痕る 側面に敲打痕と剝離あり 熱を受け赤色
106	"	花崗岩	C-7.87		13.1	19.0	6.6	245.00	全體に摩耗痕あり 磨石としても使用か
107	30	未完成	砂 岩	B-4.186	21.7	8.6	4.9	330.10	全体に調整の爲の敲打頭あり 摧純した部分あり、石凹の転用か
108	"	打製石斧	蛇紋岩	B-4.150	6.9	3.7	1.2	54.70	使用による、刃ツブレあり 片刃に近い両刃 小型
109	"	十字形石器	砂 岩	一括	6.3*	3.2	1.3	28.00	端面のみ残存 十字形石器の残欠か
110	"	收穫具?	"	一括	12.1	5.4	2.0	123.34	碧柄直あり 打製石斧の一端か?
111	"	くさび形石	粘板岩	B-5.69	7.8	10.2	1.0	82.80	端部全体に、調整を施す
112	"	"	砂 岩	一括	9.9	11.5	3.9	571.30	端部全面に調整を行う また側面に使用痕あり 片面に自然面残す
113	31	打製石鎌	黑曜石	C-4. 一括	2.1	1.8	0.6	1.93	種岳系
114	"	"	"	B-4. 146	2.7	0.9	0.3	0.76	種岳系 基部の一方が欠損。
115	"	"	チャート	B-4.114	2.0	1.3	0.4	0.90	基部の一方が欠損
116	"	"	黒曜石	B-2. 一括	1.5	1.1	0.4	0.35	種岳系
117	"	使用痕ある 剥片	"	C-4. 25	2.3	1.6	0.8	2.24	種岳系 刃部の一方に使用痕あり
118	"	"	"	B-4. 88	2.8	2.3	0.6	2.80	桑ノ木津留系 兩側に使用痕あり 一部に自然面残す
119	"	"	"	3号貯藏穴 8	4.5	1.8	0.5	3.39	種岳系 兩側に使用痕あり
120	"	"	"	" 17	2.8	1.2	0.6	1.09	桑ノ木津留系 使用痕あり
121	"	"	"	B-2.63	3.2	2.1	0.7	2.80	種岳系 使用痕あり

第6表 石器観察表(2)

(＊は現存値)

番号	図版	器種名	石質	出土地点	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	所見
122	"	"	チャート	D-2.72	5.5	3.8	1.1		侧面に刃部を形成する
123	"	"	闊縁石	4号野原穴一括	3.7	2.9	1.0	3.70	腰岳系 使用痕あり
124	"	"	"	B-4.115	7.4	6.3*	2.0	98.90	腰岳系 使用痕あり
125	"	石核	"	2号野原穴 6	5.2	8.1	2.9	108.90	東系 自然面残す
126	32	未成品 (打製石斧)	砂岩	C-2.18	10.9	4.6	1.5	77.80	加工途中で断面? 破損等なし
127	"	"	"	C-4.92	12.5	4.7	1.6	93.88	"
128	"	"	"	C-5.129	13.2	4.2	1.9	90.04	刃部大きく欠損 厚くなり両端?
129	"	"	粘板岩	B-4.128	10.2	4.3	1.3	75.70	加工悪い 刃部等も粗い調整のみ
130	"	"	"	-柄	12.2	8.1	1.8	180.95	使用痕等なし 調整も粗い
131	"	"	砂岩	C-5.27	5.2	6.4	1.5	49.24	" 上端部・基部欠損
132	"	"	"	-柄	5.2*	5.5	1.1	35.85	"
133	"	"	"	D-2.一括	10.7*	8.1	3.0	302.37	" 上端部欠損
134	"	"	粘板岩	C-2.一括	6.7*	6.3	0.8	44.12	
135	33	"	"	-柄	6.7*	7.6	1.1	85.07	" 上端部・基部欠損
136	"	"	砂岩	C-5.52	10.1	6.8	2.0	172.70	" 基部・刃部欠損
137	"	"	"	C-5.55	7.6	4.7	2.1	78.10	" "
138	"	"	"	D-3.11	8.3	6.4	2.0	112.05	" "
139	"	"	"	C-4.113	6.3	4.6	1.3	45.42	" "
140	"	"	粘板岩	4号野原穴下36	7.8*	6.3	0.9	44.65	" "
141	"	"	砂岩	B-5.53	7.1*	4.5	1.8	70.86	" "
142	"	"	粘板岩	C-4.215	6.5*	3.9	0.6	19.55	形状は有肩打製石斧に似る 刃部欠損
143	"	"	"	D-2.62	6.8	4.0	0.3	10.73	"
144	"	"	"	C-4.231	8.7	4.9	0.9	52.22	" 自然面残す
145	34	"	砂岩	-柄	7.8*	5.6	2.6	121.10	熱を受け一部赤変 制作途中に欠損し薄暗か?
146	"	"	"	B3.25	9.9	5.6	2.8	191.70	側面にツブレあり 自然面残す
147	"	"	粘板岩	C-5.141	10.8	6.0	1.1	93.80	使用痕等なし 自然面あり
148	"	未成品 (クサビ形)	砂岩	D-4.-柄	6.2	6.8	2.1	99.80	使用痕等なし
149	"	"	"	4号野原穴23	10.6	7.5	2.8	238.80	" 自然面残す
150	"	"	"	-柄	12.7	10.3	2.8	422.85	交差刻離で刃部形成、敲打痕等なし
151	35	石器集材・削片	"	-柄	17.9	9.3	2.3	507.68	二次加工なし 長剣削片
152	"	"	"	C-4.-柄	16.4	6.6	1.7	142.70	" 横長剣片
153	"	"	"	C-5.30	17.1	10.1	2.0	453.70	" 長剣削片
154	"	"	粘板岩	C-4.121	16.5	7.8	4.8		石面の転用か 摩耗面あり
155	36	"	砂岩	D-1.-柄	14.8	12.4	3.7	663.20	二次加工なし
156	"	"	"	C-3.-柄	8.9	9.8	1.6	117.70	"
157	"	"	"	C-2.9	9.0	13.8	2.1	264.70	" 横長剣片
158	"	"	"	D-5.12	11.7	7.8	1.9	114.50	"
159	"	"	"	B-4.37	9.6	5.6	1.8	94.05	
160	37	"	"	B-4.86	9.6	6.5	2.0	136.60	二次加工なし 熱を受け一部赤変自然面残す
161	"	"	"	C-4.125	6.6	7.9	1.7	73.52	
162	"	"	"	C-6.-柄	10.4	6.9	1.7	114.04	二次加工なし
163	"	"	"	B-5.75	8.2	5.7	1.2	54.60	" 自然面残す
164	"	"	"	-柄	7.1	8.0	2.0	113.15	" "
165	"	"	"	C-4.77	9.6	6.9	1.4	90.70	" "
166	"	"	"	C-5.216	8.3	5.3	1.9	69.22	" "
167	"	"	"	C-3.-柄	8.9	5.1	2.0	82.25	" "

第2節 その他の時代の遺物

大原天子遺跡からは、縄文時代以降の遺物も出土しているが、弥生土器が7点、須恵器が3点と、その数は縄文土器に比べて圧倒的に少ない。

168はC-4区から出土した壺型土器の口縁部片で、復原した口径は35.6cmを測る。内傾した口縁の外側に断面三角形の突帯をもつ。口縁上面は丸みをもち、先端も丸みをもつ。

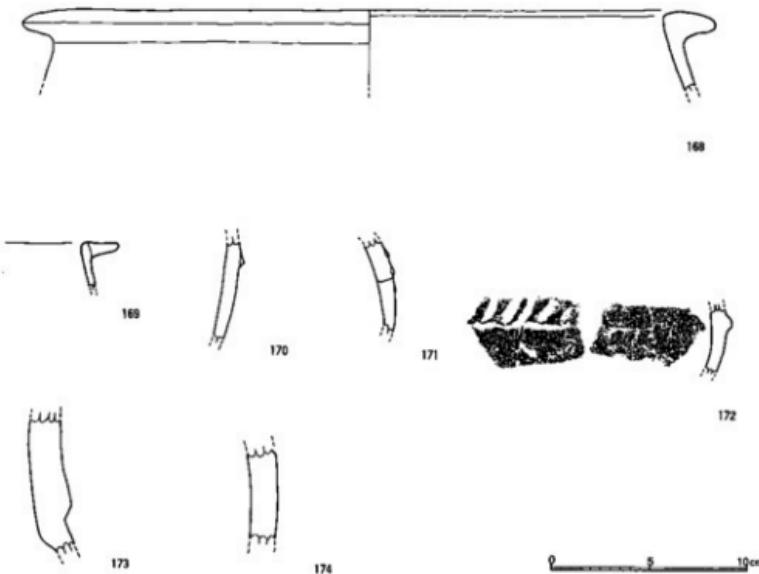
169も壺型土器の口縁部片でC-3区出土である。口縁外側の突帯は薄く、先は尖り気味である。胎土はかなり粗く、風化が進んでいるため、調整等は不明である。

170、171はともに胴部片で170はC-4区、171はB-4区出土である。丸みをもった器壁に170は1条、171は3条の小さな突帯をもつ。

172も突帯をもった胴部片でC-4区から出土した。突帯には深い刻み目が入っている。

173は胴部片でB-4区出土。分厚い器壁をもち、外側下部に明瞭な段をつくり、そこから外傾する。

174は須恵器片である。外面にタタキ目をもつ。他の須恵器片2点も同様の特徴をもつため、同一個体ではないかと思われる。



第39図 弥生土器、須恵器 実測図

第Ⅲ章 総 括

大原天子遺跡からは縄文時代晩期を中心とする土器、打製石斧などの石器や、貯蔵穴などの遺構が出土した。これらを検討することにより、この遺跡に関するいくつかの特徴が見えてくる。ここではこの特徴について述べてみたい。

土器について

土器の項でも述べたとおり、大原天子遺跡から出土した土器は、器形の特徴などから、縄文晩期後半の山ノ寺式にあたるもののが中心であると考えられ、遺跡の中心的な時期もこの時期と見て良さそうである。ただ、遺物番号30は刻目突帯などの特徴から夜臼Ⅱa式にあたると思われ、これが正しいとすればこの遺跡は晩期終末まで継続していたと考えられる。また、43・44の口縁に断面三角形の突帯をもつ土器は日向系の土器であり、流入したものと考えられる。

出土した土器の中で最も特徴ある土器は63である。復原した口径59.3cm、器高17.1cmの丸底の浅鉢形土器で、口縁部にリボン状の突起をもち、底部から胴部下半にかけて組織痕と成形時の粘土の巻き上げ痕がある。これはこの土器の成形方法を推定するうえで有力な材料を提供してくれる。まず巻き上げ痕を観察すると、底部から時計回りに粘土ひもを巻き上げていることがわかる。また、組織痕は何の組織であるかは不明であるが、土器の下半部のみに跡が残り、巻き上げ痕も下半部の方に顕著にみられる。これらのことや、底部が丸底であることから、成形の際に土器の形のもとになる「型」の存在が考えられる。「型」は繊維を編み上げた籠状のものか、籠ないしは別の材料で作られた「型」の中に編布を敷いたものの2通りが考えられ、この内側に粘土ひもを押しつけながら成形したものと推定される。

有肩打製石斧について

大原天子遺跡から出土した石器の中で特徴のあるものは有肩打製石斧である。

有肩打製石斧は、柄に装着の目的のためか基部に深いえぐりの見られる打製石斧で、南九州および南島地域に特徴的に分布している。乙益重隆氏はこれらの有肩石斧についての考察を行い、「両耳型」「凸字型」「広刃型」「靴型」の4つに分類している。その上で、これらの石斧は縄文時代の遺跡からも出土するが、弥生中後期の遺跡と重複し、単純遺跡からの出土例がほとんどないことや、この石斧が分布する地域がかつての焼畑耕作地帯で、同じく焼畑文化地帯である台湾・マレー・セレベスなどの打製石斧と形態がきわめて類似することなどから、弥生中後期の焼畑に使用された耕作具ではないかと推定している。

この遺跡から出土した遺物は、乙益氏の分類の「両耳型」に含まれる。氏は考察の中で、分類した4種の石斧が同時期の所産であるか明確ではないと述べているが、当遺跡が弥生期の遺物があるものの、あまりにも少なく、縄文時代晩期の単純遺跡としての性格を持つと考えられることからすれば、有肩石斧、少なくとも「両耳型」の製作時期の上限もおのずと縄文時代晩期までさかのばる可能性がある。

また、この遺跡から出土した有肩石斧は欠損が激しく完形に近いものは認められない。おそらく激しい使用に伴うためと考えられ、この石器の使用法を類推させる一つの手がかりとなるのではないかと考えている。

石器製作技法について

この遺跡の出土石器の特徴として、石器素材や未成品が多いことがあげられるが、それらの複数の遺物を検討することで、特に「打製石斧」の製作過程をおおまかにたどることができそうである。

①まず球磨川の川原などで直径20~30cm程度の母岩を採取し、遺物番号151~153の段階まで一次加工する。この素材には、一面に緩やかに湾曲した自然面を残しており、剥離面だけを加工するため、この自然面は完成品にも残っているものが多い。

②剥離面に加工を加え、厚みを調整する。152は、刃部形成を残すのみの段階のものである。

③素材の端部に加工をほどこし、刃部を形成する。

④柄に装着する。

この遺跡で出土した打製石斧は、概ね以上のような過程を経て製作されたものと推測される。当時の「打製石斧」の用途は、開墾や土掘りなどに使用する農具としていわば大量生産・大量消費を前提としたものと言われるが、当遺跡の場合も、石材の採取地も比較的に近く、また製作工程も比較的単純なものであるらしいことから、専門的集団が関与するようなものではなく、石器の消費者がその都度石材を素材の形で調達しておき、必要に応じて石器として加工して使用していたらしいことが窺われるのである。

遺跡の性格について

大原天子遺跡とほぼ同時期の遺跡として人吉市中堂遺跡がある。球磨川の沖積地上にあり、人吉市教委による調査の結果、晩期の大集落跡であることがわかった。この遺跡からは多数の住居跡の他、埋甕や土器廃棄場所、石器製作場所などが発見され、また多様な石器も多数出土するなど、まさに生活の大拠点の様相を示している。

一方、大原天子遺跡をみると、住居跡状遺構・集石・貯蔵穴状遺構などがあるものの、

明確な造構が少なく、また、出土遺物をみても、打製石斧以外の石器はわずかである。つまり、生活に伴う造構・遺物が大変少ないことがわかる。一方、遺跡の立地からみても居住に適する平地の範囲は非常に狭い。このことはこの遺跡が生活の本拠となる場所ではなかったことを示している。おそらくこの遺跡は生業を行うために数人が一時的に生活をする場所であり、本拠となる集落の周辺に点在する同様の遺跡の1つではないかと考えることができる。当遺跡における打製石斧はそのために使われたと考えると、このことを裏づける一つの材料となろう。

【参考文献一覧】

- 山崎純男・島津義昭「九州の土器」　『縄文文化の研究』　1981　雄山閣
泉　拓良・山崎純男「凸帯文系土器様式」　『縄文土器大観』1989　小学館
島津義昭「黒色磨研土器様式」　『縄文土器大観』
乙益重隆「有肩打製石器について」　『弥生農業と埋納習俗』　1992　六興出版
人吉市教育委員会『アンモン山遺跡』　1985
同　　『中堂遺跡』　1993
熊本県教育委員会『古保山・古閑・天城』　1980

(付論)

集石の使用実験

当遺跡で検出した集石遺構は、構成する石の中に熱を受け赤変したものがあることから、「炉」として使用されたものではないかと推測しているが、一般的な集石遺構とは石が非常に小振りであるという点において異なっている。これは、恐らく周辺で採集できる礫をそのまま使用したためと思われるが、こうした石の大小は「炉」としての使用に何らかの影響を与えるものであるか、実際に同じ規模の集石を作り、実験を試みようと思いたった。

使用実験を行ったのは、平成3年10月25日（金）の、調査も終盤を迎えた時期である。単調な調査の中でのこうした実験は、地元の調査作業員の方々にも一服の清涼剤たり得るものであった。

【実験の経過】(数字は68ページの写真に対応している。)

①集石に使用する石を集める

実際の集石に使用されていた石と同じ程度の大きさの石（直径10cm程度）を集め。基本土層の項でも触れたように周辺には川辺川の扇状地性の堆積物である自然の礫層が隨所に露頭している。実験ではこの石を利用した。

②穴を掘り、石を詰め込む

直径1m、深さ約50cm程度の穴を掘り、内部の壁面に石をまんべんなく詰め込む。

③火を燃やす

石を詰め込んだ穴と、外部に別に用意した石の両方で、石を加熱するために、薪を燃す。燃焼の時間は、約1時間をめどに行った。

④食べ物を準備する

調理するものは、肉類（鶏肉）、芋類（サトイモ、サツマイモ）、穀物（トウモロコシ）、木の実（クリ）とした。いずれも調査区の周辺で、調査作業員の皆さんから提供を受けたものである。なお、肉類は葉っぱで包むこととし、身近にあったトウモロコシの葉でくるんだ。

⑤食べ物に石を乗せ、土をかぶせる。

用意した食べ物を、穴の中にいれ、その上に用意した加熱された石を乗せ、さらにそれを土でかぶせて蒸し焼きの状態にした。調理の時間は、約2時間30分程度である。

⑥食べ物を取り出す

上部の土、石を取り除き、食べ物を取り出す。長時間が経過しているのにも関わらず、内部にはかなり熱が残り、想像以上の熱量があることが窺われた。

⑦調理後の食べ物

焼け焦げることを予想していたものの、たとえば肉を包んだ葉は、ほとんど焦げることもなく、そのままの状態である。「焼く」というよりやはり「蒸す」という調理のやりかたであったように思われる。

⑧試食する

調査の合間のおやつとして、試食する。調味料の問題はあるが、いずれの材料もむらなく焼き上がり、結構オツな味であった。

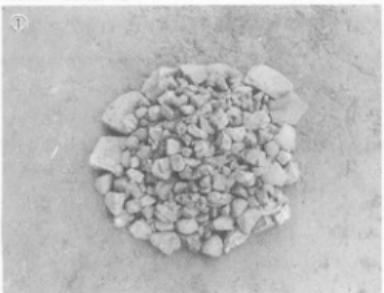
【使用実験のまとめ】

肉類は、水分が蒸発しこよい「蒸製」状になり、集石を利用しての調理は保存食を作る目的があったように思われる。もちろんこれは調理の時間を加減することにより、水分の程度を調整することが可能である。その他、芋類も適度に加熱され、良好な調理状態であった。以上のことから当遺跡出土の集石は、通常出土する大型の石を使用した集石と機能的には特に変わることがないことが判明した。

なお、こうした実験自体は、最近では珍しいものではないが、実際に自分で試してみることで、以後の発掘調査に際してもイメージが膨らみ様々に得るところがあった。

集石の使用実験

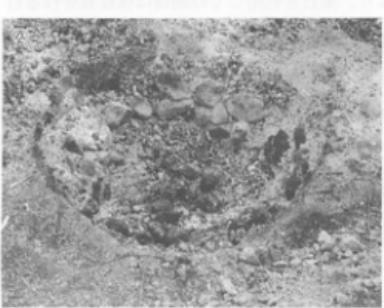
①



⑤



②



⑥



③



⑦



④



⑧



写 真 図 版

図版1



大原天子遺跡（東より）



大原天子遺跡造成工事終了後（東より）

図版 2



C-4区遺物出土状況（北東より）

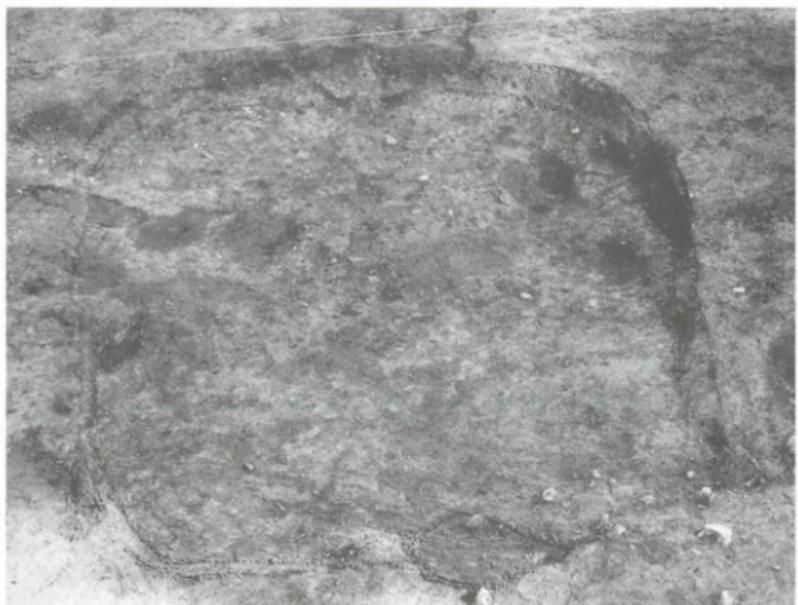


C-4区遺物出土状況（北西より）

図版 3



1号大型土坑（東より）



2号大型土坑（北より）

図版 4



1号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（北より）

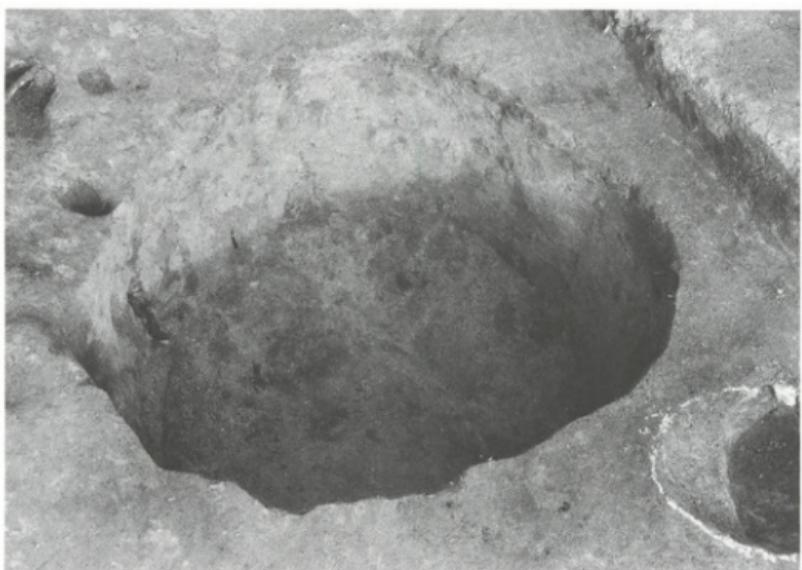


1号貯蔵穴状遺構完掘（北より）

図版 5



2号貯蔵穴状造構出土状況（南より）



2号貯蔵穴状造構完掘（南より）

図版 6



3号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（南より）

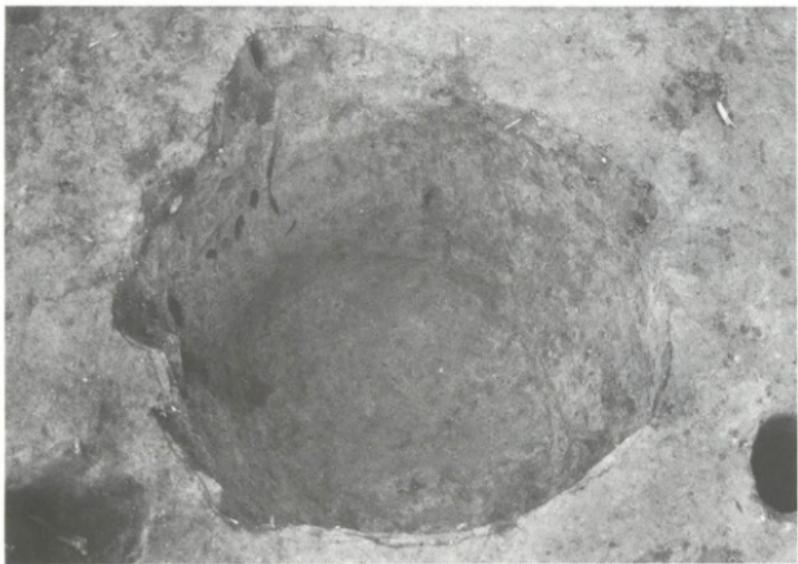


3号貯蔵穴状遺構完掘（南より）

図版 7



4号貯蔵穴状遺構遺物出土状況（東より）

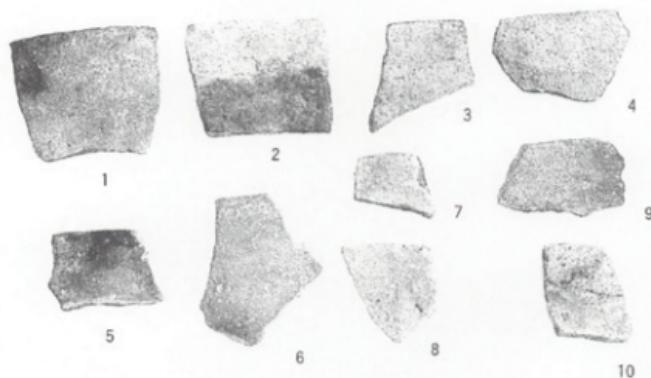


4号貯蔵穴状遺構完掘（南東より）

図版 8

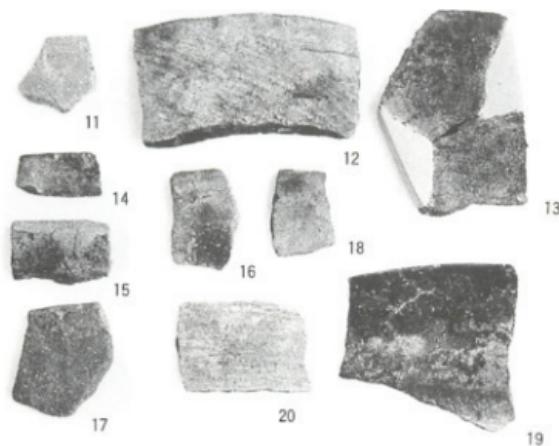


集石遺構

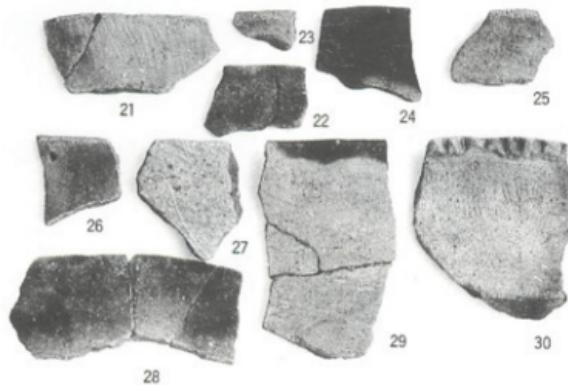


縄文土器 (No 1 ~10)

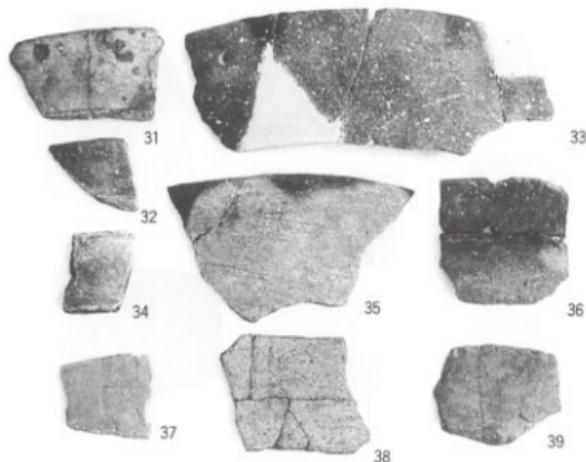
図版9



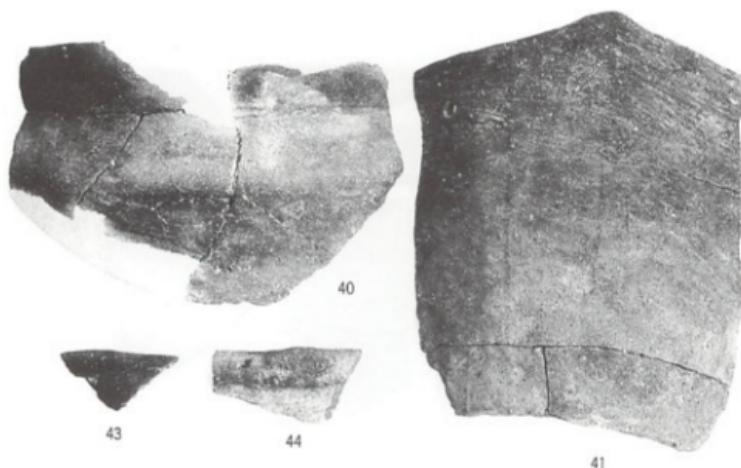
縄文土器 (No.11~20)



縄文土器 (No.21~30)



绳文土器 (No.31~39)



绳文土器 (No.40, 41, 43, 44)



縄文土器 (No42)



縄文土器 (No45~50)



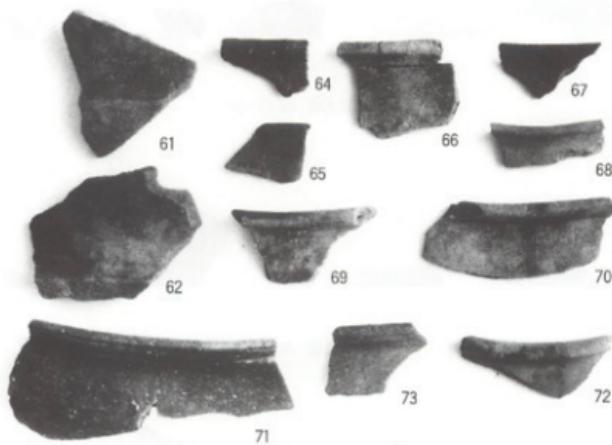
縄文土器 (No51~55)



縄文土器 (No56~60)



縄文土器 (No63)



縄文土器 (No61, 62, 64~73)

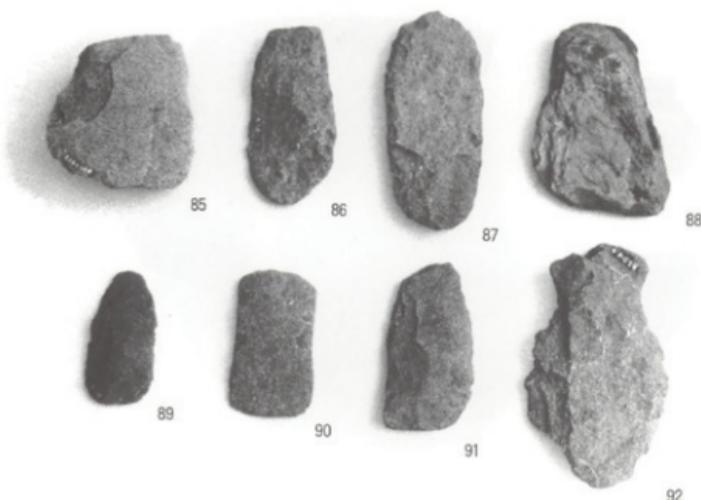


縹文土器 (No.74~76)



石器 (No.77~84)

図版14

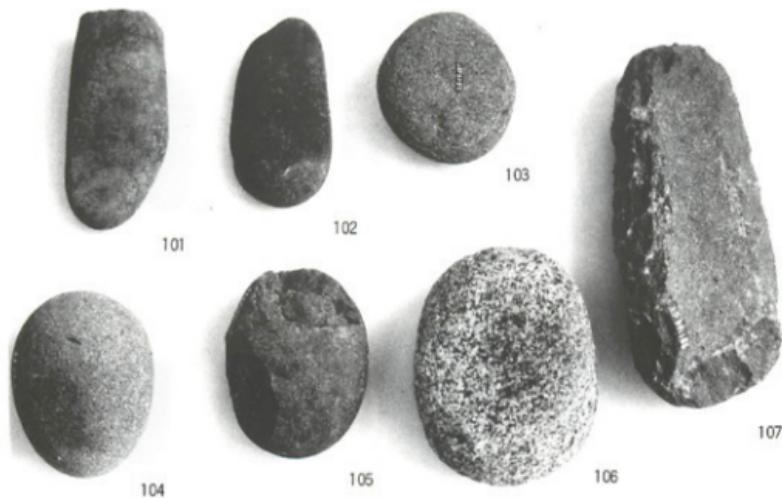


石器 (No.85~92)

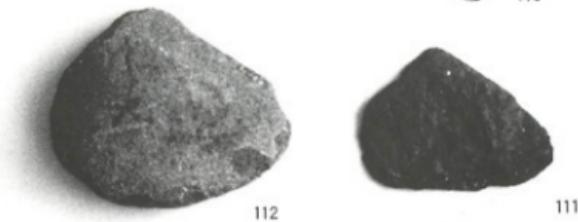
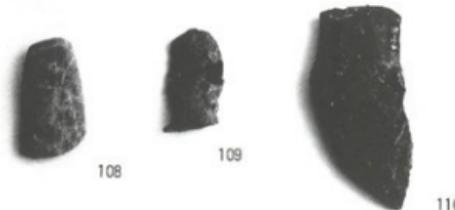


石器 (No.93~100)

図版15



石器 (No.101~107)

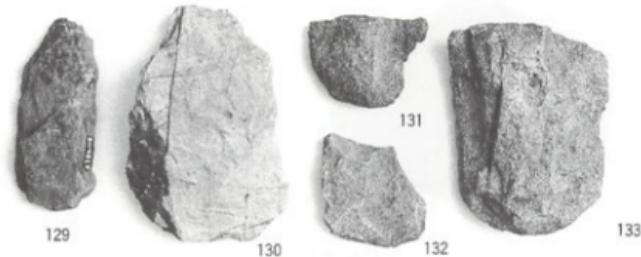


石器 (No.108~112)

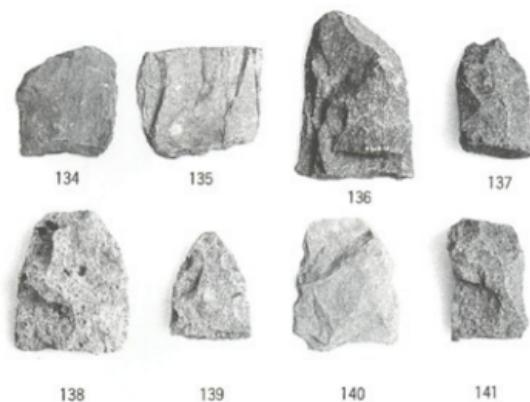
図版16



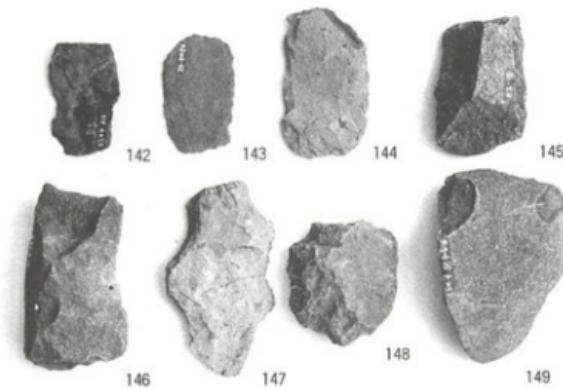
石器 (No.113~124)



石器 (No.125~133)



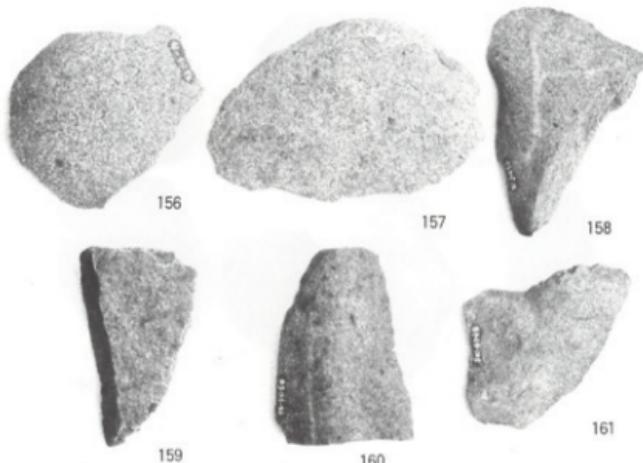
石器 (No134~141)



石器 (No142~149)



石器 (No150~155)



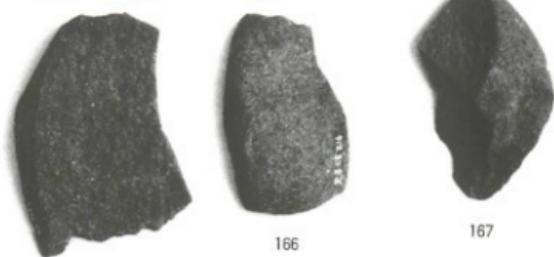
石器 (No156~161)



162

163

164



165

166

167

石器 (No162~167)



168

169

170

171



172

173

174

その他の時代の土器 (No168~174)

報告書抄録

フリガナ	オハルテンシイセキ
書名	大原天子遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第138集
編著者	丸山伸治・濱田彰久
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年	1993年3月1日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オハルテンシイセキ 大原天子	クマニシキ 球磨郡錦町大字木上	435015				H.3.7.2 H.3.12.6	2,500m ²	農業団地 造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特注事項
大原天子	包含地	縄文時代 晩期 弥生時代 中期 奈良～平安	住居跡状 遺構 集石 貯蔵穴状 遺構	山ノ寺、夜臼式 土器 打製石斧 有肩打製石斧 敲石・磨石 十字型石器 磨製石斧 楔型石器 石鏃 使用痕ある剥片 石核 石斧未製品 土器片 須恵器片	弥生時代以降の遺物は本来的なものではなく、縄文晩期の単純遺跡であると考えられる。

熊本県文化財調査報告第138集

おはるてんし
大原天子遺跡

九州農政局川辺川農業水利事業「大原団地」造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

発行年月日 平成5年3月1日

発 行 熊本県教育委員会

〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印 刷 城野印刷所

04 教委・教文
② 0 0 5

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第138集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：大原天子遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016年3月31日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL：<http://www.kumamoto-bunho.jp/>